

神通力者への道 4

人間から神へ生まれ変わった
麻原尊師の愛弟子たち



AUM PRES

神通力者への道 4

人間から神へ生まれ変わった麻原尊師の愛弟子たち

AUM PRESS

はじめに

普通の人が、修行によって人間の限界を越え、〝神〟として生まれ変わっていく過程を描いた「神通力者への道」も、本書でいよいよ四冊目となる。

本書で紹介する四名の解脱者も、オウム真理教でクンダリニー・ヨーガ成就の条件と定めている、「瞑想中のダルドリー・シッディ」「光への没入」「化身の体験」「意識の連続」を達成し、いわゆる六神通（神足通、天耳通、他心通、宿命通、死生智、漏尽通）を身につけ、さらに外気を遮断した地中で四日以上、断水断食状態のサマディを成し遂げた。彼らはオウム真理教では「正師」という称号で呼ばれているが、いずれ劣らぬ体験を有している人々である。

だが、彼らの体験に目を通していただければおわかりのように、だれもが初め

からこんな素晴らしい能力を有していたわけではない。オウム真理教に巡り合い、麻原尊師の説かれる教えを学び、イニシエーション（秘儀伝授）を授かり、尊師の指導のもと、ひたすら修行を続けることで様々な力を培い、神通力者へと変身することができたわけである。

もちろん、修行の目的は神通力を得ることだけではない。むしろ神々のような高い精神性を有し、心を成熟させ、壊れることがない絶対的な自由・幸福・歓喜に至ることこそが修行の目的であり、神通力といえどもその過程で備わる一通過点といった方が正確かもしれない。そして、彼らが修行の道に入るそもそものきっかけも、精神的な幸福や、本当の生きる目的を得ることにあったわけである。

クンダリニー・ヨーガの解脱を果たした今、彼らは様々な神通力とともに、以前よりも格段に高い精神性を有することができた。そして、それは修行の道に入るならだれもがいずれ到達できるものであり、あなた自身の未来の姿なのである。

この本を読んだ方が自身に宿る無限の可能性を確信し、修行の道に入らんこと

を願って……。

一九九二年七月

AUM PRES

※なお、本書に書かれている内容をもっと深く理解されたい方は、次の本を参照していただきたい。

『生死を超える・増補改訂版』
『イニシエーション』
『マハーヤーナ・スートラ』
『タターガタ・アビダンマ』第一誦品〜第二誦品
『超越神力』PART1〜PART3
（いずれもオウム出版・麻原彰晃著）

神通力者への道・4

人間から神へ生まれ変わった麻原尊師の愛弟子たち

大覚醒（グレート・アウェイクニング）

聖者メッター・アヴィヒンサー化身成就正師

◉新緑の中で

わたしのすべてが変わってしまった――。

六カ月に及ぶ極厳修行を終えたメッター・アヴィヒンサー正師は、道場に向かう車の中から、富士山麓の新緑をまぶしそうに見わたしながら心の中でつぶやいた。昨年の暮れも押し迫った十二月十六日、クンダリニー・ヨーガ成就を目指して修行に入ったときは、辺り一面冷たい灰色の冬景色だった。

明け方四時、まだ暗いうちに行なわれる経行修行（きんひんしゅぎょう）は、どんなに厳重に防寒していても手足の先が凍え切ってしまい、正師の病んだ体にはこたえた。修行に入る前に体調を崩し、検査をした医師から「検査の結果はいつ死んでもおかしくない数値だ」といわれる状態で極厳修行に入った正師は、「神通力が使えてマハー・ムドラー成就寸前の成就者を出す」と尊師から励まされても、驚くようなスピードで修行を進めていく他の修行者たちに、最初の数カ月はついていくのがやっとの思いだった。

「わたしはみんなとは違うんだ」という卑屈な気持ちと、「いや、わたしだって早くカルマを落として成就するぞ」と自己を奮い立たせようとする気持ちの間で心は揺れ動き、不安のあまり「尊師は本当にわたしの体の状態をご存じなんだろうか……」と、絶対であるはずのグルの意図を計りかねもした。

確かに、修行に入ったときの正師の体は、健康なころから比べると十キロ以上も太っていた。尿がほとんど出ないために水分でむくんでしまった体は、指で軽く皮膚を押すとくぼんだまますぐには元に戻らず、肌のつやも失われてしまって、とても二十五歳の肉体の若さはなかった。

ところが、普通なら即日入院して治療をしなければならないこの状態も、いっさいの薬を使うことなく、ただひたすら修行をすることによって、肉体は目の前に広がる六月の草原のように輝きを取り戻したのである。そして、それだけではなく、心の底からすべてが全く新しく生まれ変わってしまったのである。

メッター・アヴィヒンサー正師は、小刻みに震えるバックミラーに写っている

自分の顔をちらっと見た。そこには、透き通るような肌とすっきりと痩せた頬、つらく長い修行を乗り越えて得た落ち着きを秘めた大きな瞳があった。

「結局、尊師はすべてをわかっていらっしゃって修行に入れてくださったんだわ。」

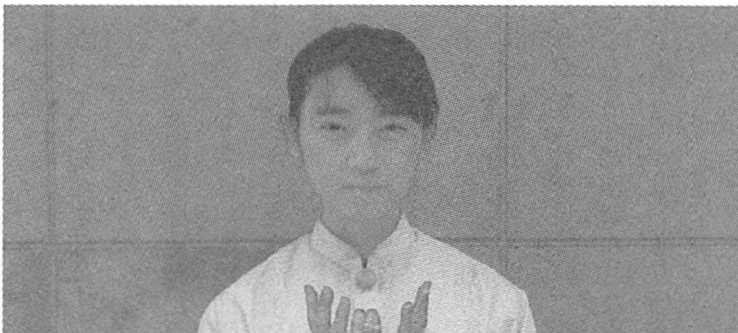
尊師という偉大なグルにすべてを委ねたとき、クンダリニー・ヨーガの解脱は訪れ、いつのころからか追い求め続けていた〝絶対的なもの〟を得ることができたのだ。正師はゆったりとシートに身をあずけて両目を閉じると、内側に広がる光に集中した。この明るく軽くけがれなき心の状態を与えてくださったグル——麻原尊師の弟子であることの比類なき幸運に感謝する気持ちが、心の底から静かにわき上がってくる。そして、メッター・アヴィヒンサー正師は、幼いころから感じてきた〝苦しみ〟から、今解放されたことを感じていた。

◉呼吸が止まる！

小学校・中学校・高校を通じて、どこへ行ってもなぜかいじめられた。大人からも「変わった子」と言われることが多かったが、自分ではどこがどう変わっているのかわからなかった。ただ一般に常識だといわれていることでも、納得できないことには必ず「NO」と言う頑固な性格が、周囲の反発を買ったのかもしれない。

小学生のころ、トイレに毎日閉じ込められるといういじめに遭ったことがある。いじめられるのは嫌だったが、先生や親に訴えるということは一度もしなかった。いじめられて泣いた覚えもない。いつも、「なぜそういうことをするの?」と、いじめる人の気持ちが全くわからないことが苦しかった。「どうしてこういうことができるんだろう」と、いくら考えても理解できなかった。「自分には人からいじめられて苦しまなければならない何かがあるのだろう」と半ばあきらめ気味に理解するしかなかった。こんなこともあって、小さいころから漠然と、「普通

の生活はしていけないだろうな」と思っていた。
　メッター・アヴィヒンサー正師が霊的な世界とつながったのは、高校一年のつまらない出来事がきっかけだった。いつのころからか女の子の間で行なわれるようになった〝コックリさん〟は、ほんの小さな願い事をかなえてもらったり、恋占いをしたりといった他愛のないおまじないとして根強い人気があった。彼女の通う女子高校でも、林間学校ともなれば気の合った者が数人集まってコックリさんを呼び出していた。
「えっ、わたしが今年中に死ぬですって？」
　思いもよらないことを告げるクラスメイトの顔をまじまじと見つめて、彼女は聞き返した。
「びっくりしたわよ。コックリさんをやっていたら、突然あなたの名前が出てきて、今年中に死ぬって言うんですもの。」
　コックリさんを信じていたわけではなかった。しかし、このほんの冗談のよう



な言葉がきっかけとなって、知らず知らずのうちに彼女の精神状態はおかしくなっていった。

まず夜眠れなくなった。意識が冴えわたってベッドの上で空しく時が経つのを待った。そうこうしているうちに、突然部屋の中にざわざわと百人ほどの人たちが入り込んできたような気配がした。恐怖に身を硬くした彼女の耳に、

「帰ろうよ、この世はつらいでしょう。もう帰ってもいい時期だから、帰ろうよ。」

とささやく声が聞こえてきた。

声は一方的に聞こえるだけではなく、普通に人と会話をするように彼女の言葉に答えてもくれた。端からは、部屋で独り言を言っているようにしか見えなかっただろうが、彼女にはその声がはっきりと聞こえていた。こんなことが頻繁に起こり始めた。もしだれかがこれを見ていたら、気が狂ったと思って彼女を精神病院に入れていたことだろう。だがおかしな出来事はそれだけではなかった。次に、夜中に勝手に手が動き出して、はっきり憶えてもいないような小さなころのこと

をノートに事細かく書き始めたのだ。何があったのか、そこで自分がどう思ったのか、まるで一生を振り返ってザンゲでもしているようなものだった。それが大学ノート何冊分にもなったころ、「人は死んでもまた次の生があり魂は永遠不滅である」というようなことを書き始めた。もともと死後の世界について興味があったわけではなかった。ただ手が勝手に書くのだ。そんなことを書き続けながら、林間学校でコックリさんに予言された〝今年中に死ぬ〟ということの覚悟をどんどん固めているのだった。

そしてある日、休み時間の教室で、ふと呼吸をしていない自分に気がついた。

「どうしよう。わたし、息をしていない!」

最初は苦しくなかったのに、息をしていないことに気づくと、序々に苦しくなった。周りにいる人に、何度も叫んで助けを求めたが、だれもその声に気づいてくれなかった。そうこうしているうちに肉体の方がばったりと倒れて、やっと気がついた級友が慌てて保健室に担ぎ込んだ。

「呼吸が停止していた。わたしが今年中に死ぬというのはこのことだったんだ。」倒れた肉体とは別に、不思議と鮮明な意識の中であのコックリさんの予言の意味を納得していた。

この事件が起こってからは、眠れない夜の恐ろしい気配や、勝手に手が動き出して過去を書き留めるといった心を乱すようなことは起こらなくなったが、もともと他人の心の動きに敏感だったこともあって、日常的に直感力が鋭くなっていった。あと一週間くらいしたらだれが学校を休むかということ、クラスメイトがどんなことで悩んでいるかということが自然にわかってしまうのだった。

◉何のために生まれたのか

高校三年になったメッター・アヴィヒンサー正師は、ちょっとした病気で入院した母親の、「看護婦というのは大変な仕事だけど、お給料もいいらしいよ」という何気ない言葉がきっかけとなって、看護大学を受験することにした。他人の

苦しみがわかりたいという思いがあったし、自分が周囲に打ち解けられなくて苦しんだ経験から、患者さんの立場に立った看護ができるのではないかと思ったからだ。

一年の浪人の後、晴れて名古屋市郊外にある看護大学に合格した正師は、友人とのおしゃべりやスポーツを楽しみ、つきあっているボーイフレンドとの仲に悩んだりという普通の大学生活を送っていたが、心の中では、自分は何のために生まれてきて何をしなければいけないのかを常に考え求めていた。

大学に入ってから始めた登山では、長く急な山道を一歩一歩登り、苦労して頂上にたどり着いたときの爽快感（そうかいかん）がたまらなく好きだった。頂上の静寂と透明感のあるすがすがしい空気にふれると、何かとても懐かしい感じがした。山で過ごす一夜、満天の星を見上げながら、自分が何を求めているのかわからないもどかしさが彼女の胸を騒がせることもあった。

大学の看護実習では、普通の生活では経験できない多くのことを学んだ。例え

ばこんなことがあった。担当していた脳卒中の患者さんが何かを訴えているのだが、何を欲しているのかどうしてもわからなかった。尿も出ているし熱があるわけでもない。しかし、患者さんは全身で何かを訴えている。そして二時間も経ったころ、ようやくその患者さんは水が飲みたかったのだということがわかった。この経験は、いかに他人の心がわかるということが難しいかということを痛感させてくれる苦い経験だった。看護婦は、他人の苦痛や痛みといった目に見えないものにアプローチしていく仕事である。「水が飲みたい」という、たったそんなことも理解できなかったことは大きなショックだった。もっと人の心が的確にわかるようになりたい、テレパシーのような超能力があればいいのにと思った。

高校三年のとき、母親の勧めで「Sの家」に入信していた。もしかしたらそこに求めるものがあるかもしれないと学んでみたが、すごいなと認める部分もあったが、やはりどこか違うという思いがあって積極的に活動するまでには至らなかった。

◉一冊の本から真理へ

ある日、メッター・アヴィヒンサー正師は、立ち寄った本屋で何気なく一冊の本を手に取った。
「『マハーヤーナ』……か。ああ、この人テレビで見たことがある……。」
と表紙の男性の顔を思い出すがままに本を買い、家に帰ってすぐに読み終え、次の日には家からそう遠くないところにあるオウム真理教名古屋支部に行っていた。ちょっとのぞいてみようという軽い気持ちだった。
オウム真理教の道場で対応してくれた大師に、「わたしには自由になるお金がないから入信費用全額は払えない」と言うと、入会費ができるまで仮入信という形を認めてくれた。母にも、趣味の一環としてヨーガをやるためにオウム真理教に入ろうと思っていることを告げた。
ちょうどそんなとき、大学の友人のMからS教に入ったと電話があった。オウム真理教の教義もまだほとんど理解していなかったが、Mの話からS教にはおか

しさを感じた。
「絶対おかしいよ。明日わたしも一緒に行くから、説明してもらおうよ。」
と言って、翌日Mと一緒にS教の事務所に乗り込んで、納得のいかないところを問いただした。しかし、こちらが矛盾点を上げても、
「まだ知るべきことではない。次のステップに行ったら教えます。」
と言うばかりで、すべてを明かしてはくれなかった。S教の人の対応に憤慨した二人は、その帰り道思いついてオウム真理教の道場へ行った。
そこではS教での対応とは対照的に、二人の疑問一つ一つに対してクンダリニー・ヨーガの成就者が懇切丁寧に説明をしてくれた。それは深夜の三時にまで及んだが、あらゆる疑問に納得できる答えを得ることができた。一緒についてきただけのMは、すぐにS教を辞めてオウム真理教に入信してしまった。そして、早速次の日から道場へ通って功徳を積み始めた。そのMを導いたことが大きな功徳になったのか、ほどなく、「思いがけずお金が入ったから、これでちゃんと入信できる

よ」と言って、Mが足りない入信費用を出してくれた。
そのころ大学では看護実習が始まっていて遅くまで授業がある日もあったが、その後しばらくして導いた同じ大学の友人のKを加えた三人で、どんどんビラ配りのバクティに励むと、高校生のころの恐怖の体験とは違うリアルな神秘体験が次々と起こり始めた。

◉尊師の声に導かれて

正式にオウム真理教に入信してしばらくすると、メッター・アヴィヒンサー正師は夢の中で尊師に会った。〝尊師の夢を見た〟のではなく、〝夢で尊師に会った〟という表現がぴったりするほど現実的な夢だった。そして、それをきっかけにして、毎日夢の中で尊師が、「今日はどうしなさい。こうしなさい」と具体的な指示をしてくれるようになった。「何人入信に導きなさい」という指示が出て、それを意識して友人に話をすると意外なほどすんなりと導くことができた。

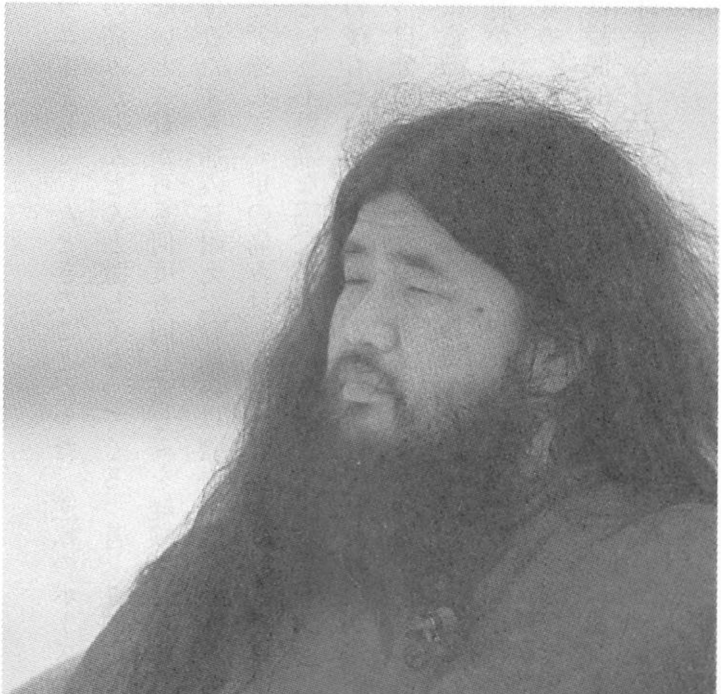
「ビラ配りをしなさい」という指示のとおりに毎日ビラを配って功徳を積んでいくと、環境がどんどん良くなっていった。例えば、オウム真理教に対する中傷記事が、まるで仕組まれたように次々とマスコミを通じて世に出た時期がある。始めは反対していなかった母親もこれを読んで猛反対に回り、熱心に活動する娘を監視するために自ら車で大学への送り迎えをするまでになってしまったことがある。そんな不自由な環境でも、何かと工夫しながら、夢に現われた尊師の指示のとおりに功徳を積んでいった結果、あんなに反対していた母親が、ある朝突然「オウムに入ったんでしょ。頑張ってね」と言うまでに環境が好転してしまったのである。

そして、決定的な体験は入信して一カ月半ほど経ったころ起こった。

正式に入信してからも道場での行法はほとんどせず、ビラ配りのバクティに全力を尽くしていると、もともと持っていた霊的素養が大爆発した。

それはいつものように深夜ビラ配りを終えて家に帰り、寝る前に部屋でビバリー

大覚醒



タ・カラニーをしていたときのことだった。逆転のポーズをしてしばらくすると、腰と足の痛みがどんどんと激しくなってくる。苦しさの中で、今この苦しみを乗り越えないとこれからも何度も同じ苦しみを経験させられるんだと思い、尊師を意識してひたすら痛みに耐えた。痛みは腰から腹、腹から胃へと少しずつ上がっていった。そして、足の痛みはしびれへと変わり、しびれが気持ち良さに変わっていくという不思議な感覚になり、やがてその感覚さえ感じない状態になっていった。その後もビバリータ・カラニーを続けていたのだが途中で意識を失ったらしく、いつ自分が横になったのか憶えていなかった。

完全に意識を失っていたのだろう、突然「起きろ！」という声とともに、頭を金棒か何かで殴られ、頭蓋骨（ずがいこつ）が割れてしまったのではないかと思うくらいの衝撃で目が覚めた。もちろん部屋にはだれもいなかったが、その声の主が尊師だということは瞬間的にわかった。そして、自分の頭の上に尊師がいらっしゃる感覚がした。耳元でピーピーとアストラル音楽が鳴っていた。その後だった。支部で指

導してくださっている大師の、「音に集中して」という声が聞こえたので、そのとおりに集中していたら、体がどんどん小さくなって豆粒ほどの微小なものになってしまったような感覚にとらわれたそのとき――。

突然、ゴーッという音がしてトンネルの中を飛んで行く感覚に襲われた。それはものすごいスピードで、たとえロケットに乗ったとしても味わえない速さだった。

気がつくとさほど明るくない空間にいた。

そして、目の前には白い服を着た髪の長いとても美しい女性が立っていた。尊師の声で「守護神だよ。よく顔を覚えておくように」と言われたので、まじまじと見つめていたが、すぐにまた尊師の声で「さあ、行くぞ!」と言われ、再び上へ上へと飛んでいった。

「光に集中しろ」という尊師の声に従って、眼前に見える白銀光を凝視していると、その光がどんどん近づいてきて大きくなっていった。辺りがさらに明るく

なってきたころ、「光に飛び込め！」という尊師の声がしたと思ったら、突然、バッシャーンという音とともにまるで水の中に飛び込んだような感覚がした。そして、自分自身が無限大に広がっていって最後は水そのものになってしまったように感じた。それは、何ともいえない幸福感――自由で歓喜の至福の状態だった。

そして、目の前には一人の人間のような――しかしよくよく見ると男女合わせて五、六人のオウム真理教の祭壇に掛かっているグヤサマジャに似た顔があった。そのうちの一人が、「早く戻っていらっしゃいね」と言った。「ああ、早く戻ってきたい」と心から思うとともに、「ここは以前来たことがあるな」というある懐かしさを感じていた。同時に、今はまだここにいてはいけないことも感じていた。しかし、あまりにもその空間が幸福に満ちていたために「このままでいたい」と思った瞬間、「今はまだだめだ。さあ、行こう」という尊師の声がして、「そうだ、今はまだだめだ。ここにいてはいけない。行かなくては」と思った。

そして、今度は下へ下へと飛んで行った。

◉こうしてわたしは生まれてきた!

その下へ飛ぶ苦痛といったらとても激しいもので、上に向かって飛んでいたときとは全く逆に、全身の力を振り絞って空間の圧力と闘いながら逆行して飛んでいくのである。物理的に考えれば下へ落ちる方がたやすいはずだが、このときはほんの少しでも力を抜こうものならば上へ引き上がってしまうという感覚がした。心には「頑張って降りよう。尊師と約束したのだから」という不思議な決意があった。

バッシャーンという水音とともにまたもや水に飛び込んだ。

水の中にいる状態でも苦しさはなかった。まるで居心地のいいカプセルの中で過ごしているような感じだった。自分以外にもそこで過ごしている人がいるような気がした。一定の期間そこで過ごした後、頭上に硬い輪っかのようなものがはまって、頭がぴったりと固定され、自分の体を自由に動かすことができなくなった。そして、自分を包んでいたカプセルにひびが入ったように水が流れ込んでき

て、自分の周りにどんどん水が浸水してきた。やがて体は水に浸かってしまって、序々に苦しいという感覚が出始めたころ、何かとても狭いところを通らなければならず、その圧迫感が苦痛で、「ここから早く出たい。早く出たい」と思った。その圧迫はどんどん強まり、体が二、三回ぐるぐると縦に回転したような感じがして、水のようなものを嘔吐し頭から新たな空間にぐっと押し出された。

そして、「オギャー」と声を出した。

次の瞬間、自分自身の肉体に意識が戻り目が覚めた。そのとき、今自分が死んで生まれるプロセスを追体験したことをはっきりと実感していた。

人間が生まれるとき、まず卵と精子が受精すると受精卵は子宮へと着床し、そこで細胞分裂が始まり人間の体へと変化していく。子宮の中は水で満たされて胎児はへその緒によって母体とつながっているために呼吸をしなくても酸素が得られる。出産が近づくと胎児は母親の骨盤の方へ下がりはじめ、頭が骨盤にはまり込む姿勢となって胎動が減る。これが輪のようなものに頭がはまったという感じ

になったのだろう。さらに水が入ってきたというのは、出産前、卵膜が破れて破水するときであろう。その後胎児は産道という大変狭いところを通りながら生まれてくるのであるが、そのとき回旋といって産道のカーブに合わせて体をねじりながら出てくるのだ。すべてが体験と一致していた。

◉尊師のもとへ

オウム真理教に入信してから起こる神秘的な体験は、高校時代に経験した苦しく恐ろしい霊的な体験とは全く違っていた。ダイナミックで透明で確実にグル・麻原尊師の説かれる世界の体験――教義で説かれているとおりの世界を実感できるという素晴らしいものだった。

巷には多くの宗教がある。しかし、その説かれている世界を実際に体験できる修行体系と、そこに弟子を導くことのできるグルがいる教団がいったいいくつあるだろうか。オウム真理教の素晴らしさは、すべてが実践的だということだった。

解脱・悟りという漠然とした言葉だけでなく、信徒の目の前に、実際に解脱し悟りに到達した先輩がいて、その神秘的な世界の体験を話してくれた。これは到達するための地図があり、道しるべがあり、最終地点まで導いてくれる指導者がいるということである。あとは自分が努力しさえすれば、確実に心の成熟と霊的進化を獲得することができるのである。

大学卒業を三カ月後に控えて、メッター・アヴィヒンサー正師はオウム真理教に出家することを考えていた。尊師とはまだ一度もお会いしたことがなかったが、これこそが求めてきた世界だという確信があったし、どこか深いところで尊師とつながっているのを感じていたから、一日も早く直弟子となり、自分が生まれてきた意味を教えてほしいと願うようになっていた。

八九年が明けて、大学では卒業試験と国家試験に向けて皆目の色を変えて勉強に励んでいた。一度看護婦になってしまったら、看護婦という仕事の責任の重たさから、すぐに仕事を辞めて出家するなどということはできないように思われた。

そうならないうちに、できれば就職する前に出家したいと何度か支部の大師に相談していたが、「ひたすら功徳を積みましょう。ビラ配りです」と、いつも同じ答えしか返ってこなかった。

布施・奉仕の功徳によって願望がかなうという体験は、オウム真理教では数々ある。しかし理屈として知ってはいても、ビラ配りをするだけで難関の国家試験・卒業試験に合格できるとはとても思えなかった。親の反対で出家は難航しそうだったし、試験勉強には手がつかないしと、同じ大学の仲間二人とともに、みんなが徹夜で勉強しているのを横目で見ながら、一抹の不安を胸に深夜ビラ配りに精進した。とにかく、ひたすらエゴを捨ててグルとシヴァ大神へのバクティをする以外に方法はなかった。

そうして迎えた卒業試験と国家試験――たとえ合格しなくても出家するのだからとあきらめ半分だったが、もともと得意だった分野の問題が出たり試験会場に行く電車の中で開いていたページから問題が出るといった具合いで、全く勉強不

足だったにもかかわらず合格してしまったのである。オウム真理教の教えが真理だということは、もうこの数カ月のうちに確信を持っていたが、このときばかりは、功徳を積めば良いことが返ってくるという「カルマの法則」をつくづくと実感した。

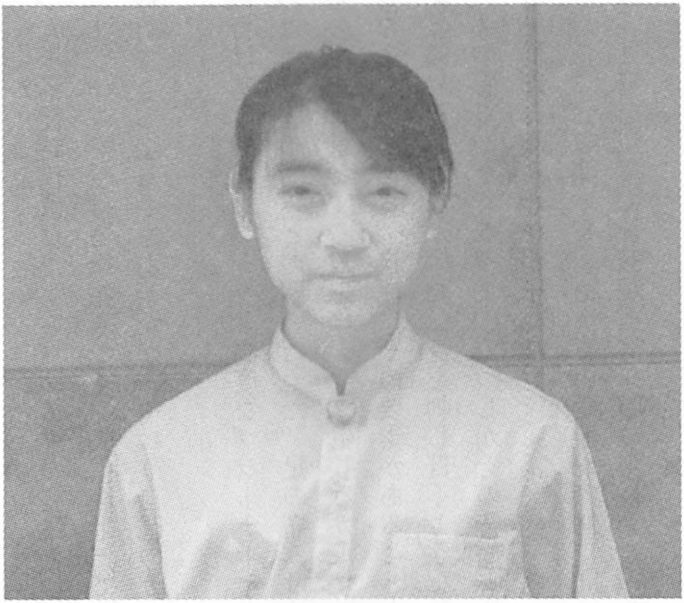
八九年三月、反対していた両親も、娘がこれほど思っているのだからと最後は半ばあきらめるようにして出家の準備を手伝って送り出してくれた。こうして大学を卒業し国家試験にも合格して晴れて尊師のもとへ、解脱のために出家することができたのである。

◉はじめての集中修行

ちょうどそのころオウム真理教では多くの出家者を迎えていた。尊師は、この新人出家者のために清流精舎での集中的な修行を行なわせてくださった。

メッター・アヴィヒンサー正師にとっては、清流精舎でのこの修行が初めての

大覚醒



集中的な修行だった。信徒時代はひたすらバクティの実践をし、高度な瞑想を伝授されるイニシエーションを受ける余裕もなく、入信後半年で出家してしまったから、思い切り修行できる楽しさもあったが、やはり自己のカルマに苦しんだ期間でもあった。

清流精舎での修行は基本的なマントラと高度なプラーナーヤーマを中心とする修行だった。初めは蓮華座の痛みとの闘いだった。足の痛みは地獄のカルマ――つまり自己の嫌悪の心を背景とする殺生によって生じるカルマで、最も低い世界へと転生する因となるものである。自己にその要素があることを十分知っていたので、苦しみに耐え続けるしかなかった。身を刺し貫くような激しい痛みに長時間耐えていると、体の感覚がなくなって、いつしかその苦痛も遠ざかっていく。感覚というものも結局幻影なんだなと思った。

蓮華座を組み続けることによって、もともと骨盤が内側に向いている体型だったものが、ばきばきと音を立てて骨盤が正常な形に変わってしまった。そして、

蓮華座のままいきなり体が空中に飛び上がった。オウム真理教では珍しくないが、空中浮揚の前段階に起きるジャンプだ。このダルドリー・シッディが止めようと思っても止まらないほどの激しさで起こった。

それをきっかけとして、瞑想中にいろいろなヴィジョンを見るようになった。光り輝いている尊師が出てきたこともあったし、目の前に白い牙を持った光り輝く人——シヴァ大神が立っていたこともあった。修行に入ってほぼ一カ月経つうちには、心が安定し体も軽快になっていき、静かに蓮華座で座っている自分の周りを、やはり蓮華座を組んだたくさんの僧がぐるぐると回っている明るいヴィジョンを見たりもした。霊的体験がどんどん進んでいくので、もしかしたらこのまま解脱してしまうのではないかと思っていたちょうどそのころ、ワークに就くよう指示が来た。

◉大乗の種子を

オウム真理教では、尊師の救済計画に基づいた様々な活動が繰り広げられている。多くの人々を解脱に導くことはもちろんのことだが、日常生活においても幸福になれるように、特に現代的な慢性病や不治の病に対しては、東洋医学、チベット医学、インド・アーユルヴェーダ医学理論を取り入れた独特の医療を、西洋医学を学んだ専門家によって行なっている。メッター・アヴィヒンサー正師は、清流精舎での集中修行の後、この医学による救済計画の中心となるオウム真理教附属医院に配属になった。

修行者は自己のエネルギーを浄化し、強化し、高い意識状態を経験していく。しかし、他の煩悩的なエネルギーにまみえたとき、この修行で得た高いエネルギー状態はいったん下降してしまう。クンダリニー・ヨーガを成就していれば、少しの修行でエネルギーを元の状態に戻すことができるが、まだ修行の途上の修行者では難しい。しかし、自分が修行で得たエネルギーを他の魂のために放出するこ

とは、麻原尊師の大乗の救済者としての基本的な姿勢だった。信徒さんや一般の人と接することによって修行で培った高次元のエネルギーを放出し、また修行するという繰り返しで自己の器を大きくしていくという尊師の歩かれている道——到達真智運命魂（菩薩）の道を、弟子たちも同じように歩んでいくことになる。

オウム真理教医院での活動は、患者さんの体に直接触れるということもあって、修行者にとっては特に厳しい環境だったが、オウム真理教の医学理論によって西洋医学では助からないと思われていた患者さんが回復したり、末期ガンの患者さんが信じられないくらい延命したりと喜びも大きかった。しかし、患者さんのカルマを受けて体調が悪くなることはどうしても避けられなかった。ザーと音を立てるようにして体が急激に冷えて、呼吸停止が起きて倒れ、体が端から硬直し始めて意識がスッとどこかへ飛んでしまいそうになったときの体験は、尊師のご著書『生死を超える』の中のバルドー体験に酷似していた。「人は死ぬときこんなふうになるのだ」と自ら実感できる体験だった。

東京にあるオウム真理教附属医院でワークをしていると、普段富士にいらっしゃる尊師を目にすることはほとんどない。しかし、一度だけ尊師が医院にいらっしゃったことがあった。ある入院患者さんが意識不明になったとき、熊本にいらした尊師は深夜車をとばして駆けつけ、失われていた患者さんの意識を呼び戻されたのだ。看護大学に在学中、担当していた病棟で人の死を多く見ていた経験から、もう助からないだろうと思われるような状況だった。しかし、尊師は患者さんの意識を呼び戻した。意識不明の瀕死の患者さんが、数分後には「ソーマが飲みたい。丹が食べたい」と言うのを聞いて、自分の持っていた医学の常識ががらがらと音を立てて崩れていくのがわかった。尊師の神秘力を目の当たりにして、ますます信は深まり、このような素晴らしい力を得ることのできる解脱への思いが募った。

◉教学修行から極厳修行へ

そんなとき集中的な教学修行に入るようにという指示があった。

教学によって修行者は、まず真理の法則を徹底的に記憶し煩悩的なデータを駆逐する。その後、周りの現象を真理の法則に基づいて考えることによって真理のデータを根づかせる。このプロセスによって心は浄化され、高い世界を志向することになり、それに伴って神秘的な体験も進んでくる。

メッターー・アヴィヒンサー正師の場合も集中的に経典を記憶修習していくうちに、「ああそうか！」と心から法則が納得できるときがあって、そのときは必ず尾てい骨から頭上までエネルギーが上昇し光を見ることができた。この教学修行は約六カ月間続いた。

教学修行を終えて、いったんオウム真理教附属医院でのワークに戻った。その期間、重症の末期ガンの患者さんの看護を専属で行なったこともあって、ワークに就いて一カ月で体調を大きく崩してしまった。検査した医師からは「いつ死ん

でもおかしくない結果だ」と言われ、はっきりとした原因を確かめるためにさらに精密な検査を必要としていたとき、尊師からクンダリニー・ヨーガ成就のための極厳修行に入る四十人の一人に指名されたのである。

九一年十二月十六日、第二サティアンビル二階の道場で極厳修行は始まった。三階の尊師のお部屋に近いところで尊師が直接指導してくださるという最高の修行環境である。初めて尊師が道場にいらっしゃって一人一人の様子を聞いてくださったとき、メッター・アヴィヒンサー正師は、オウム真理教に入信してから初めて尊師と直接話せることの喜びと緊張に、はやる胸を抑えてひとこと言葉を発した。すると返ってきた尊師の言葉は、

「何だその声は。おまえは質問をするな!」

という厳しいものだった。

「他の修行者には、優しいお声で丁寧にアドバイスなさっているのに、なぜ、わ

たしだけ?」
と目の前が真っ暗になるようなショックを受けた。しかし、尊師の対応は、次の日もまた次の日も同じだった。他の修行者は修行の体験を話し、尊師から今はこのような状態だからこうしなさいというふうに毎日修行の進度を明らかにしてもらっていた。それがうらやましくてほんの少しでも体験があった日は、尊師に誉められたくて思わず話し出すと、返ってくる尊師の答えは、
「体験はどうでもいい。しゃべるな!」
と取り着く島もなかった。
「やっと尊師のそばで修行できるというのに……。」
と心は傷ついたが、これが弟子に対するカルマ落としであることは、今までの成就者の体験談からわかっていた。自分の今まで積んだ口のカルマを思えば仕方がないと考えたが、やはりこのカルマ落としはずいぶんとこたえた。
苦しいのはそれだけではなかった。体がとにかくおかしかった。夜の経行がつ

らい。自分が冬眠中の動物かと思うくらい動きがにぶい。寒さに対する嫌悪があって、人一倍厚着をしているのに寒くて寒くて震えてしまう。体が冷えているせいか数十分おきにトイレへ行って修行どころではない。名古屋支部で活動していたころは、ヨーガでいうところのラジャス(動性)の性質が強いと周囲も認める活動家だった。それが、修行に入って本来のタマス(暗性)――根本的な無智が出ている状態になっていた。修行中もついウトウトと眠ってしまうことが多く、動作はまるでスローモーションビデオを見ているように鈍い。自己のカルマが出てきて自分でもどうしようもない状態だった。しかし、どんなに尊師に怒られても、「患者さんのカルマを受けてこんな状態になっているだけなんだ。これは本当のわたしではないんだからいいんだ」と一生懸命自分を正当化していた。

●根本無智との闘い

この状態は三カ月続いた。どんなに眠るまいと思っても、気がつくと時間が二、



三時間も経っているということがしばしば起きた。自分の力ではどうすることもできなかった。信徒時代には霊的な体験も豊富だったし、清流の修行ではもう解脱してしまうのではないかと思うほど修行が進んでいたのに、クンダリニー・ヨーガの修行に入ってからは、霊的体験どころか眠りと食欲に完全に翻弄されてしまっている。一日二十時間連続の立位礼拝修行をやっているとき、近くで修行している法友から、

「どうして修行しないの。自分がタマスだってわかっているでしょ。もっとしっかりやらなきゃ。」

と厳しく言われて初めて自分の状態に気がついた。それまで自分では全力で修行しているつもりだったのだ。しかし、そう言われてみてよく考えると、一時間に五、六回しか礼拝をしていないときがあったような……。自分の中と外界の時間の流れが完全に食い違っていた。

修行中、変化身（へんげしん）で家へ飛んだことがあった。家の中央に母親がいて、その周りには母の好きな宗教である「Sの家」の強いエネルギーが取り巻いていた。家の奥の方にはわが家代々の宗教のエネルギーがあった、そしてその他に母の実家の宗派のエネルギーと、最近情に訴えて母を入信させたオウム真理教のエネルギーが一番戸口側にあった。その様子から、オウム真理教は母に受け入れられていないことがわかった。わが家の中で様々な神々がうごめいているという感じがした。父親は家の奥で小さくなって動けなくなっていた。家の中のエネルギーが完全に分裂し混乱している。変化身で行ってそれを見て、なんとかしなければと思う気持ちがありながらも、その異質なエネルギーの混乱に耐えられなくて瞬間的に移動してしまった。

立位礼拝中、突然バタンと倒れてしまった。「どうしたんだろう、以前からよくあった呼吸停止だろうか」と思っていたら、心配したプンナ正悟師が尊師にお

伺いしてくださった。

「完全脱水の状態だ。一日六リットル、サットヴァ・レモンを飲むこと。」

という指示があった。断水断食をしていたわけでもないのに脱水症状だとは信じられなかった。とにかくまだ体が治っていなかったんだと思うと力が抜けた。しかし、尊師を信じて目の前の課題を一つ一つこなしていくしか方法がない。

修行が始まって三カ月近くもの間、体の不調と根本的な無智に苦しめられ続けたメッター・アヴィヒンサー正師だったが、冬が過ぎ春の訪れとともにだいぶ体が楽になったと思えるころ、クンダリニー・ヨーガ成就の決め手となる四つの体験が同時に爆発的に訪れた。

◉大覚醒

グルヨーガの供養法の瞑想に入ってからのことだった。朝の経行が終わって、

いつもと違って今日は集中できていると思われた。究竟の瞑想でもいい結果が得られるような予感がして、いつもより強く尊師を意識して瞑想に入った。
　まず頭上から透明な直線の光が射してきた。頭の周りが青が混ざった銀色に明るくなった。そして肛門がグッと自然に閉まったと思ったら、頭に圧迫感を感じた。すると、バーンというものすごい爆発音がした。それとともに体、特に頭がすごく振動し始めた。しばらく止まっていたダルドリー・シッディが起きたのだ。そして、親指くらいの大きさの、蓮華座で座っている尊師の鮮やかな姿が見えた。「あっ、尊師が見える」と思った次の瞬間、体の下の方から硬直が始まっていた。どんどんどんどん硬くなり硬直は次第に上に上がってくる。そっと脈拍を測ってみると一分間に四〇から三〇と落ちていた。そしておなかの辺りが、フッと緩む感覚があったと同時に、ゴーッというすごい音がして、頭上に向かってもう一人の自分がものすごいスピードで飛び出してサハスラーラ・チァクラから真上に向かって抜けていった。あまりのスピードに、いったい自分の手を上にやったらい

いのか横にしたらいいのか迷った。とにかくロケットよりも速いスピードで飛んでいくのに驚いて途中で意識が肉体に戻ってしまった。このとき意識は鮮明で二つに分離していた。

つまり、このときダルドリー・シッディ、光の体験、変化身、意識の連続というクンダリニー・ヨーガ成就の基準となる四つの体験を一瞬にして経験してしまったのである。

◉歓喜に包まれて

極厳修行に入ってからは、自分の知らない自分を尊師によって引き出されているという感じがした。体の調子が戻って修行も進んでくると、今度は食の煩悩に振り回される自分がいた。最もひどいときには、何を見ても食べ物に見えて、台所の石鹸(せっけん)さえおいしそうに見え、思わず食べてしまうのではないかと恐怖していたほどだった。何をしでかすかわからないそんな自分が恐くて、部屋に縄でくく

りつけてもらおうかとさえ考えた。例えば、自己の肉体までも供養するという瞑想があるが、そのとき自分の肉体を大変おいしそうに感じてしまって、食べたくて食べたくて仕方なかった。それほど激しい煩悩だった。それはもう自分で捨断できるようなものではなかったので、ただひたすら尊師に助けてくださいとお願いした。すると一気に心がチェンジして食べ物を見ても心が動かなくなった。

三月にはオウム真理教のロシア救済ツアーが行なわれ、修行が一時中断されたこともあったが、極厳修行に入って六カ月目の六月の初めチェンバー修行に入るよう尊師から指示があった。

クンダリニー・ヨーガの判定は、四つの体験と最後に地中に埋められたステンレス製の小部屋の中での五日間の瞑想において酸素消費量を測定し、呼吸停止(サマディ)に入ったことを確認して成就となる。初めはオウム真理教のマハー・ムドラー以上の成就者にのみ課せられた修行だったが、今ではクンダリニー・ヨー

ガの成就者すべてに義務づけられている。
この修行に入った何人かの成就者から、チェンバー内は一人きりで瞑想できて快適だと聞いていたので、半ば楽しみにしてチェンバーに入った。ところが、入ってみると、もともと持っていた活動的な性格、ラジャス傾向が出てきて、入ってから三、四時間も経つとじっと座っていることができなくなった。
「どうしたらいいんだろう、今からこんなふうでは、五日間も耐えられそうもない……。」
足を投げ出してみたり、蓮華座を組み替えたりと落ち着かなかった。
結局、この五日間のチェンバー修行は、六カ月間の極厳修行中現われたものが凝縮して出てきた。
チェンバーに入って二日目のことだった。だれもいないチェンバーの中で尊師の声がした。
「落ちるぞ！」

「何だろう、落ちるとは？ もしかして成就できないということだろうか……。」と不安になった。しばらくして、トイレに立ったとき、高い台座になっている瞑想台から「あっ」という間もなく一・二メートルほど下の床に落ちて頭と腰をしたたかぶつけてしまった。後に尊師からそれは殺生のカルマだと指摘された。六カ月に及ぶ極厳修行で筋力が衰えていたため再び瞑想台に上がるのに息が切れた。こんなことをしていては酸素消費量が多くなって成就できないのではないかと心が暗くなった。やっと上に登ると、もう一度気を取り直して修行に向かった。すると、どこからか尊師のマントラが聞こえてきた。「やはり尊師は見ていてくださる」そう思って、眠らないように時計を三分おきに鳴るようにセットし、心機一転して瞑想に入った。

するとと、自分自身がつぼみになったような――つぼみから花びらが広がって、そしてこの広い空間にとけ込んでしまうような、自分が宇宙に無限大に広がっていくような瞑想体験が起きた。そして、体中を満たす歓喜の状態が訪れた。その

とき、これこそがずっと以前から追い求めてきたものなのだということに気づいた。

メッター・アヴィヒンサー正師がチェンバーから出ると、早春の富士から吹いてくるさわやかな風が頬を心地よく撫でた。歓喜状態はまだ続いていた。心の奥底からわき出るような喜びが全身を満たしている。自分がどんなに努力してもこんなふうに変わることはできなかっただろう。成長した自分でもない、理想としている自分でもない、全く知らない新しい自分――そこに到達するまでに何一つ自分で成し遂げたものはなかった。すべては偉大なるグル・麻原尊師によって与えられたものだった。

哀れな修行者に救いの手を差し伸べてくださった尊師に感謝します。

尊師にいただいたこの新たな命を救済のために生かすことを誓います。

シヴァ大神、グル、すべての真理勝者方に
——未来際において変わらぬ帰依を誓います。

※五日間の酸素消費量測定の結果、チェンバー内で連続して呼吸停止していた時間は五時間五分。五日間の呼吸停止の総計は十時間二十二分。メッター・アヴィヒンサー正師は完全なサマディ（三昧）に入っていた。

COLUMN—1

◎最終解脱に至るまでの六つのヨーガ

一、ラージャ・ヨーガ

強靭な意志力を背景としたヨーガ。現在のインド・ヨーガでは、このラージャ・ヨーガが主流である。ただし、インドでは十年に一人、二人しか成就しないといわれている。

二、クンダリニー・ヨーガ

生命エネルギーのヨーガ。尾てい骨に眠るクンダリニー・エネルギーの覚醒、上昇によって煩悩を昇華する。

三、ジュニアーナ・ヨーガあるいはマハー・ムドラー

分析智のヨーガ。自らの煩悩を思索によって分解する。このヨーガの成就をもって小乗の完成とされる。仏典でいう〝阿羅漢〟の境地。

四、大乗のヨーガ

三つのヨーガの成就をベースに、四無量心（聖慈愛・聖哀れみ・聖称賛・聖無頓着）の実践をなすヨーガ。

五、アストラル・ヨーガ

報身のヨーガともいう。この段階まで

来ると、「魂の救済」以外には全く頓着がなくなる。

六、コーザル・ヨーガ

コーザルでデータの入れ替えを行なうヨーガ。このヨーガを完成して最終解脱をすると、すべてが自由になる。

現在オウム真理教ではラージャ・ヨーガの成就者が約百五十名、クンダリニー・ヨーガの成就者が約百名、マハー・ムドラーの成就者が八名、大乗のヨーガの成就者が三名存在する。

マハー・ムドラー、大乗のヨーガの成就者の体験は、『ザ・サマディ』『原爆覚醒』『秘儀の世界』（いずれもオウム出版）などを参照していただきたい。



旅立ちは死を超えて

聖者キレーサ・バハーナ・アーナンダ到達光正師

ツァンダリーの詞章を唱えているときのことだった。何やら熱いものが尾てい骨から頭頂に向かって突然上昇していくのがわかった。

この修行に入ってから何度も経験していることである。特別気にもならなかった。が、この日ばかりはいつもと少しばかり様相を異にしていた。いつもならアナハタ・チァクラ（胸部）で勢いが弱められてしまうエネルギーが、まるで胸の部分の壁が一枚取り払われたかのようにすごい勢いで上昇するのである。

そして、その瞬間、わたしの心はまるで一種のポアを受けたかのように、大きくチェンジしているのだった。つい先程まで彼女に対する情、あるいはプライドなどで引っかかっていたのが嘘のような……、それほどまでの大きな心の変化だった。

（なるほど、尊師がおっしゃっていたクンダリニー・ヨーガの煩悩の昇華のプロセスというのはこういうことだったのか……。）

それは、長い悪夢からようやく解放されたような晴れ晴れとした気分だった。

そして、そのとき、クンダリニーの上昇に伴う喜悦を享受しながら、妙にサバサバした気持ちで心の中でこんなことを呟いていた。

(人の感情なんてチァクラのけがれにすぎないんだな。経験の構成によって生じたけがれでしかなく、チァクラが浄化されるだけでこんなにも人の心は変わってしまうんだ。そんなものを今の今まで〝自分〟だと思ってとらわれて、なんて愚かだったんだろうか……。でもこれからはだまされないぞ。)

さらに、初めて味わう寂静の窮地に浸りながら再びツァンダリーの詞章に集中していると、不思議なことに今度は感覚そのものが徐々に消えていくのだった。強烈な痛みを伴った蓮華座の感覚も、畳に座っている感覚も、肉体の感覚は何もかも気がつくと潮が退くように消え去っていた。

右上方からキラキラと輝く黄金色の光が差し込んでいるのに気づいたのはその直後のことである。その光は徐々に強くなり、神秘的で優しいヴァイブレーショ

ンを発しながら、最後にはわたしの身体を完全に包み込んでいた……。
そこは歓喜に満ちあふれた世界だった。そこでのわたしには煩悩によって動かされる〝感情〟そのものがなく、すべてが止まっているかのように思えた。もちろん、苦しみなどいっさいない、長い間求めていたものがようやく得られたような、そんな満足感さえ与えてくれる世界だった。
そのときわたしは、本当の幸福というものを知ったような気がした。そして、この幸福を自分と縁のある一人でも多くの人たちに教えてあげたいと心から願っているのだった……。

●無常なるがゆえに

すべては無常である。それゆえ苦である。たとえ今は幸福だとしても、いつか必ず崩れ去ってしまうもので、その瞬間、我々はその幸福から離れるときに生じ

る大きな苦しみを経験しなければならない。そして、そのとき幸福を感じさせてくれる対象への執着が大きければ大きいほど、苦しみも大きくなることはいうまでもない。

恋人との別れ、肉親や知人との死別、あるいは病や老いによる肉体や環境の変化……。抗しきれない運命の前に、我々はこれまでに何度悲しい思いをさせられたことだろうか。だれしも自分の人生をちょっと振り返ってみるだけで、この「無常なるがゆえの苦しみ」の意味が心から理解できるのではなかろうか。

しかし、この無常なるがゆえの苦しみも、実は滅尽できるもの、乗り越えることができるもので、そのための法がこの世界に存在していたことを皆さんはご存じだろうか。

一九九二年三月――。およそ三カ月にわたる修行の末、わたしはクンダリニー・ヨーガの成就によって解脱・悟りを得た。そんなわたしに麻原尊師は〝キレーサ・パハーナ・アーナンダ〟というホーリー・ネームを授けてくださった。パーリ語

で「煩悩捨断の喜び」という意味だそうである。

幸せだった。壊れることのない本当の幸福を求め、すべてを捨てて出家してから一年余り。ひたすら求め続けてきた解脱・悟りは想像以上に素晴らしく、わたしに本当の幸福がいかなるものかを教えてくれた。そして、その幸せに比べたら、我々がとらわれているこの現世での幸せというものが、取るに足らないつまらないものであることも理解できた。

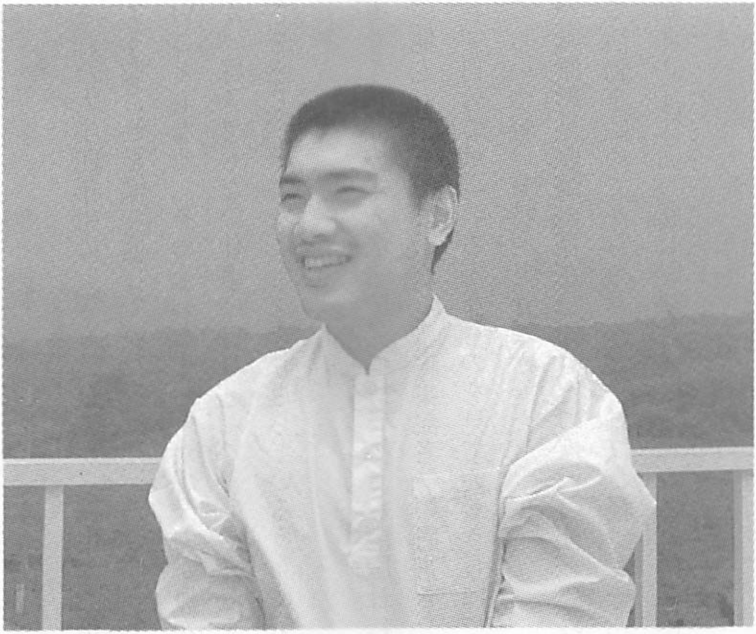
そんなわたしの体験が、同じように壊れることのない本当の幸福を得たいと願っている皆さんの参考になるなら幸いである。

◉真理との出会い

思えば、すべては一つの出会いから始まった……。

オウム真理教に出家する前のわたしは、典型的なモラトリアム人間だった。周囲が当然のごとく良しとするものにも盲目的に飛び込むことができず、人生の大

旅立ちは死を超えて



きな岐路に立たされた大学四年生のときも、企業から採用の内定をもらっては辞退する、というようなことを繰り返していた。

特別にやりたいこともなく、その上、なまじっか想像力が豊かだったことが災いしたのだろうか。好きでもない仕事に打ち込んで一生を終えていく自分の姿を想像しては空しさを感じ、そんなことを繰り返しているうちに気がつくと卒業式を迎えていたのである。

その末に、仕方なく新聞の求人広告で見つけた小さな出版社に就職。零細企業の社員とはいえ、他人がうらやましがる〝編集記者〟の肩書きをとりあえず得たわけだが、それとて自分では「いろんなものを見ているうちにやりたいことも見つかるだろう」ぐらいの軽い気持ちしかなかった。

そんなわたしが麻原彰晃尊師の存在を知ったのは、会社を辞めてフリーランスのライターとして活動を始めてからちょうど一年ほど経った一九八九年二月のことである。この前年の十二月、後に結婚することになる女性と出会うのだが、彼

女を通じてその存在を知ることになった。が、もちろん、この出会いが後のわたしの人生を大きく変えることになるなど、そのときのわたしには知る由もなかった。

当時のわたしはすでに週刊誌や月刊誌などでレギュラーの仕事を抱え、しかも、ちょうどこのころ世間を騒がせていたリクルート事件を追っていたこともあって、多忙極まりない毎日を送っていた。そのため彼女と会うときはいつも夜から深夜にかけてで、新宿三丁目界わいの行きつけの飲み屋や二十四時間営業のファミリーレストランなどで話をする程度のつきあいしかできなかった。色気もなにもあったものではないが、時間のないわたしにとってはそれでも精いっぱいのサービスのつもりだった。

そんなある日のことである。いつものように彼女と深夜にまで及ぶ気ままな会話を楽しんでいるとき、こんな話題がつい口を出てしまったのは彼女に心を許していたせいだろうか。あるいは、フリーランスのライターとしていろんなものを

見ることで、エゴを満足させるためには他人を犠牲にしなければならない社会の構造に気づき、「そんな社会で、一生かけたって生きがいなんて見つかるもんか」と絶望感に似た叫びを発していた心の隙間を埋める何かを心底求めていたせいかもしれない。

「人間て不思議だよね。自分だと思っているものは、実はよくよく考えてみると単なるデータの集積なんだよね。もし違う人生を歩んできたならきっと違う自分が形成されるわけでしょ。そう考えると自分の存在ってどう考えるべきなのか……、これってほんと難しいよね。」

それまでだれと話しても明確な答えを得ることができなかった疑問である。もちろん、このとき彼女からその答えを得ようなどという期待は針の先ほどもなかったことはいうまでもない。

ところが、意外なことに彼女の答えは、それまでこの質問をぶつけたどの相手よりも自信に満ちあふれ、そして、明確なものだった。

「それを語るにはまずわたしたちの〝真我〟が自分本来の姿を見失って落下していくプロセスから話さなければならないわね。真我というのはわたしたちの本質で、いわば本当のわたし、本当の自分っていったらいいかな。そして、その真我がラジャス、タマス、サットヴァという三つのグナ、三つのエネルギーに影響されて自分本来の姿を見失っている今の状態があるの。

それはこの一生だけの問題ではなく、わたしたちは無始の過去から迷妄へと引き込まれているのよね。だから魂は欲六界という苦しみの世界を輪廻転生しなければならない。でも、解脱した魂、悟った魂はその苦しみから逃れることができるんだよね。」

「苦しみから逃れるって、どういうことなの?」

「涅槃という言葉を聞いたことあるでしょ。最終的な涅槃の場がマハー・ニルヴァーナなんだけど、そこで真我は絶対的な自由・幸福・歓喜のままの状態でとどまっていられるの。」

「でも、解脱とか悟りとか、そういうのってヒマラヤの山奥の話でしょ。今の日本ではほとんど不可能なんじゃないの？」
「そんなことないって。日本でもそういう境地に至った人がいるのよ。今度本を貸してあげるから読んでみたら。」
後でわかったことだが、彼女はわたしと出会う直前に実姉に勧められてヨーガ教室に通う軽い気持ちでオウム真理教に入信していたのである。このときの明快な答えも、ほんの数週間前に麻原尊師の著書を通じて仕入れた知識を展開しているにすぎなかったわけである。
ともあれ、ひょんなことから麻原尊師の存在を知ることになったわたしに、この数日後、一冊の本が渡された。本のタイトルは『生死を超える』（麻原彰晃尊師著　オウム出版刊）。これがわたしと真理との出会いであり、すべての始まりだった。

◉精神世界へのいざない

ただ、宗教嫌いのわたしがオウム真理教に入信するまでには、実際はこの出来事からおよそ半年ほどの期間を要することになる。それは職業がら宗教にのめり込んでいる人たちの危険なケースを多々見てきたのが原因かもしれない。

まあ、これはあくまでも一部の悪質な団体の例だが、巧みなセールストークに導かれて壷や多宝塔に数千万円を布施する人や、街頭でわけのわからないパフォーマンスに興じている人の気持ちは残念ながら理解できなかった。また、退会希望者への数々の嫌がらせ、これも本人たちにいわせれば〝救済〟ということになるらしいが、敏腕記者顔負けの深夜に及ぶ日参や電話攻勢、中には犬や鶏の死骸を家に投げ込んだりしてまで必死に引き留めようとする過激なケース（そんなことをして本当に引き留められるとでも思っていたのかいまだに疑問だが……）を耳にする度に、宗教とはまた一歩疎遠になっていくのだった。

しかし、そんな気持ちとは裏腹に、以後わたしの意識は徐々に麻原尊師に向け

られていくから、運命とは不思議なものである。表面上は否定していても、心の奥に潜んでいた何かがそれを望んでいたような、麻原尊師の存在を知ってからはまさにそんな展開だった。
　最初の事件が起こったのは、一九八九年の三月のことだった。麻原尊師が宗教団体の教祖と知るや彼女が貸してくれた本も読まずじまいで、とうの昔に部屋の隅の雑誌や本の山に埋没してしまったころの話である。一日の睡眠も二時間程度と多忙を極めていたある日、こんな夢を見た。
　辺り一面、白銀色の世界に一人たたずんでいると、唐突に白いクルタに包まれた長髪で髭もじゃの男性が現われた。その男性は同じような白のクルタに身を包んだ人たちに囲まれながらわたしの方に向かってゆっくり近づいてくると、にっこり笑いながらこんな言葉をかけてきた。
「素直になりなさい……。」
　落ち着き払った、威厳のある声だった。

この直後に飛び起きたわたしが、三十分かけて探し出した『生死を超える』の表紙の尊師の写真を眺めながら、呆然自失の状態で朝を迎えた姿は想像に難くないだろう。まさしくその髭もじゃの男性こそ、もちろん一度も会ったことがないはずの麻原尊師その人だったのである。この突然の出来事は少なからぬショックをわたしに与えた。

◉葛藤の末に……

「すごいじゃない。やっぱりあなたも縁があるんじゃない。」

ヨーガ教室に通う気楽な気持ちのはずが、修行を進めるうちに麻原尊師の教えにすっかり傾倒するようになっていた彼女は、わたしの体験を聞くとまるで自分のことのように無邪気に喜んでいた。

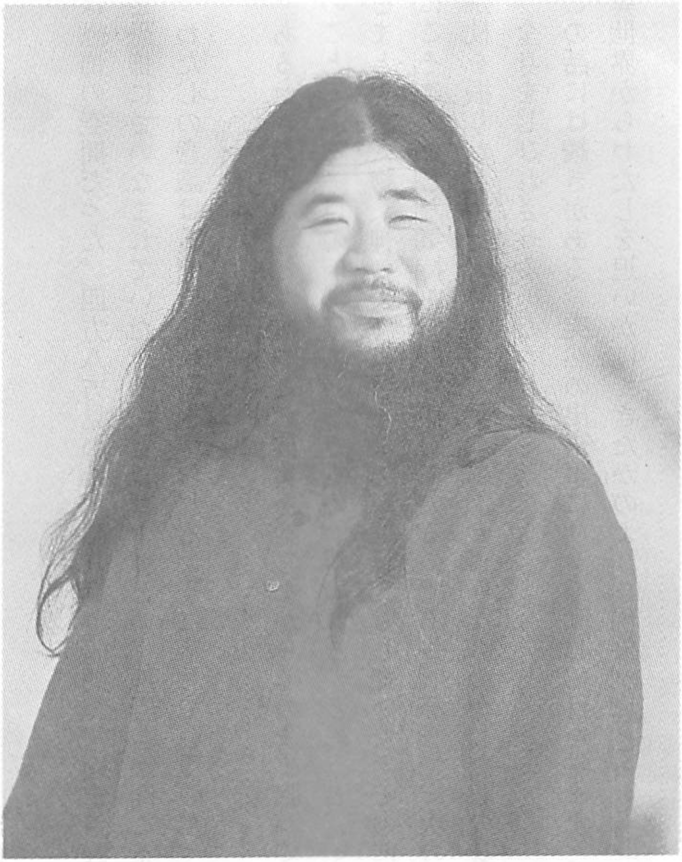
ただ、わたし自身、そんなことがあっても宗教そのものに対する抵抗はぬぐい去れず、それでもかたくななまでに本を読むことさえ拒否していた。

が、それも以後次々と起こる神秘的な事件の前に、さすがに降参せざるを得なかった。中学生のとき以来しばらくおさまっていた神秘体験が再び頻繁に起こるようになっていたからである。おそらく熱心に修行していた彼女のクンダリニーのエネルギーに感応したのだろう。中には恐怖感を伴う体験もあり、最後はオウム真理教の大師（※当時、クンダリニー・ヨーガの成就者をこう呼んだ）に相談せざるを得ない状況に追い込まれた。

そのときの数ある神秘体験の中から代表的なものを紹介すると、こんなものだった。

やはり仕事でかなり疲労していたある日のこと、ベッドに仰向けになりながら天井を見つめていると、突然、金縛りのように身体が固定された。そして、目を開けているのにもかかわらず目の前が徐々に暗くなり、身体を動かしての必死の抵抗も空しく、次の瞬間、意識は別世界らしき暗闇の中へと放り出されたのであ

旅立ちは死を超えて



る。

そこは恐怖の空間だった。四方八方見わたす限り真っ暗闇で、固定された意識は不安と恐怖にさいなまれていた。そのときゴーッという地響きが聞こえたかと思うと、わたしの意識は暗闇の底に引きずられるように落ちていくのだった……。

また、あるときこんなこともあった。彼女と話しながらそのまま眠ってしまったときのことである。目の前に祭壇らしきものが現われたかと思うと、その上に白い衣をまとった人物（神のように思えた）が仁王立ちしていた。その前でわたしは妙にこそこそとした気持ちでひれ伏しているのである。そして、次の瞬間その人物が杖を振りかざすと、何やらエネルギーのようなものがわたしの身体を包み込み、全身をしびれさせるのだった……。

実はこの話には続きがある。突然の出来事にびっくりして目を覚ますと、その人物が異世界からわたしを追いかけてきたかのような現象が起こったのである。

隣で本を読んでいた彼女の右腕がひとりでに震えだし、意思とは無関係にわたしのアナハタ・チァクラをかきむしり始めたのである。彼女自身もひどく驚いた様子で、わたしが先程のヴィジョンの話をすると感激することしきりだった。

正直いって当時のわたしには、オウム真理教がいいのか悪いのか全くわからなかった。常に締め切りに追われる生活で、尊師の著書を詳しく検討している暇さえなかったからである。いや、正確に言うなら、真剣に検討すればこの現世を基盤として生活する自分の生き方そのものを否定せざるを得ないことを直感的に知っていたようで、深く考察することを避けていたのかもしれない。

とはいえ、このころになるとさすがに運命とも思えた大きな流れの前には逆らえず、結果的には彼女に勧められるままにとりあえず入信することにした。

「あなたは絶対にオウム真理教に入信しますよ。心配しなくても大丈夫よ！」

と、神秘体験に関するもろもろの相談の末、初対面のときから図々しくもこう

言い放っていたシャンティー大師の言葉が現実になったのは八九年六月下旬。真理に出会ってから実に五カ月目のことだった。

◉解脱・悟りへのあこがれ

とはいうものの、そんな曖昧なわたしだから、それから約一年九カ月余りの在家時代の活動ぶりは推して知るべしだろう。長年修習してきた宗教に対する観念にはやはり抗し難く、尊師の本も読まなければ説法も聞かない。彼女にせかされるままに道場に顔を出すことはあっても(このときでさえ心の中では「早く帰りたい」といつも念じていた)、修行によって変わろうなどというたいそうな考えはこれっぽっちもなかった。

それでも尊師への畏敬の念だけは、他の信徒さんたちにも引けをとらないものを持っていたから不思議ではある。入信してからしばらくして、たまたま仕事で尊師にインタビューさせていただく機会に恵まれたのだが、何もかもわかってく

ださる包み込むようなスケールの大きさ、救済活動に対するひたむきさに大感激。その感動をどうしても伝えたくて、仕事を終えてからタクシーを飛ばして彼女のアパートに押し掛け、夜通し尊師について語り合ったこともあった。

また、不熱心の割には布施に対する抵抗も全くなく、シャクティーパットのように事前に準備コースに通うような時間を要するようなものは別にして、イニシエーション、シークレット・ヨーガなどは勧められるままに受けていた。まあ、それとて修行のためとは思っておらず、「熱心に勧めるからただなんとなくやっていた」というのが偽らざる心境だったのだが……。

ただ、この間、解脱・悟りというものに一度も心が動かなかったといったら、やはり嘘になるだろう。当時の教団機関誌『マハーヤーナ』の成就体験談は彼女のお気に入りで、会う度にああでもないこうでもないとその感動を伝えてくるのを聞いてると、自然に解脱・悟りへの興味は強くなっていた。

（もしかしたらオレも解脱できるかも。いや、出家したら絶対に悟れるに違いな

い。）

今考えれば恥ずかしい話だが、教学も修行もほとんどしなかったくせに、いつしか真剣にこんなことを考えている自分に気がついたことさえある。

おそらくそんなわたしの心を尊師もご存じだったのだろう。シークレット・ヨーガの度に「キミはわたしと縁が深い」とか「キミが出家すればオウム真理教の出版を通じた救済活動も勢いがつくだろう」などと声をかけてくださり、わたしを励ましてくださった。

そんなこともあって、わたしも一時は真剣に出家を考えてみた。が、そのころになると早くから出家を望んでいたはずの彼女の方が逆に方向転換してしまい、結婚を熱望するようになっていた。そのため二人で納得いくまで話し合ったが、未知の出家生活の不安にはどうしても打ち勝てず、ついに在家で行くことを決心した。

「まあ、二人とも出家のカルマがあるんだったら、いずれは自然にそういう方向

に導かれるはずさ……。」
「そうだよね……。」
こんな会話が二人の間で何度か繰り返し交わされた末の結論だった。そして、九〇年四月に結婚。その結果、それ以降も熱心に道場に通う彼女を後目に、忙しさにかまけて思い出したころに道場に顔を出すような、そんな生活を繰り返していたわけである。

◉訪れた転機

しかし、そんな生活は意外にも長くは続かなかった。やはり運命だったのだろうか、転機はほどなくしてやってきたのである。
忘れもしない九〇年十一月十七日。恒例の友人たちとの飲み会からほろ酔い気分で帰ってきたわたしのすぐ目の前で、彼女は血だらけになりながらあっけなく逝ってしまった。別れの言葉すらかける暇もない唐突な死だった……。

今考えても本当につまらない事故だった。この日帰宅したとき彼女は浴室にいたのだが、ガージャ・カラニーをやろうとバケツを取りにいったわたしを中に入れまいとドアを押し返した拍子にガラスが割れ、その破片がわき腹の動脈を貫いたのである。その程度でガラスが割れるなど全くもって不可解で、偶然に偶然が重なった最悪の事故だった。再現しようとしても、おそらく二度と同じ結果は得られないのではないだろうか。

ところで、そのときわたしの目の前で繰り広げられた光景は、まさに地獄のようだった。床一面に広がるドロドロした血の海の上で、ジーンズを血だらけにしながら「何なんだこれは！」と絶叫しながら必死に止血しようとするわたしの努力も空しく、彼女は目の前で最後に大きく深呼吸をするとそのまま動かなくなった。そして、その数分後、駆けつけた救急車ですぐに病院に運ばれたが、祈りも空しく、二度と意識が戻ることはなかった。

不思議なことに、このとき涙も出なかった。悲しい境遇に同情したのだろうか、

死を看取った数人の若い看護婦たちが彼女の亡骸を前にしたわたしを見ながらしきりに泣きじゃくるのだが、どうすることもできず、その前でただ呆然と立ち尽くすしかなかった。「本当に悲しいときは涙も出ないものだ」とだれかに聞いたことがあったが、それが本当であることを確認できたような気さえする……。

◉苦しみを乗り越えて

だが、わたしにとって本当につらかったのはそれからだったのかもしれない。一瞬にして単なる肉の塊に変わり果ててしまった彼女の死の瞬間は鮮明に脳裏に焼きつき、一日のうち何度となく現われては恐怖させ、また、後悔させた。不可抗力とはいえわたしの行動が彼女の死の直接の原因になっていたことが何よりも心を苦しめたのである。また、偶然に偶然が重なった信じられないような事故であるがゆえにあきらめきれずに、「どうしてこんなことに？」と繰り返す肉親たちの悲しみも、返す言葉さえないわたしをつらくさせるのだった。

この前後の心境を率直に表わすなら、〝自暴自棄〟という言葉がぴったりだろう。変わり果てた彼女の亡骸を思い出すととにかくすべてが煩わしくなり、食事も喉を通らず、まして仕事をする気などとても起こらなかった。まさに全くの無気力状態で、万事がこんな調子で、葬儀を終えた後は部屋にいるのもつらくて夕方ごろごそごそ起き出すと目的もなくただ盛り場をうろつくような毎日を過ごしていた。

しかし、それでも「酒だけは絶対に飲むもんか」と心に強く決めていたのが今考えれば唯一の救いだったかもしれない。もはや発狂寸前のストレスにさいなまれながらも、一方で、「絶対に負けるもんか。この苦しみに真っ向からぶつかってやろう」「大切な人を失ったときの悲しみがどんなものか見てやる」という気構えを失うことは不思議となかったのである。

実は、それもこれも麻原尊師のお蔭だった。彼女が逝った翌朝、サクラー正悟師にこの事故のことを報告した直後に、わざわざ電話をかけて励ましてくださっ



た尊師。たった一人の信徒のためにそこまでしてくださる優しさを思ったとき、本当に心からうれしかった。

「大変だったなあ。でも、すんでしまったことはどうしようもない。それよりもこれからのことを考えなさい。」

「人が死ぬところを間近で見れるなんて、君は幸せだぞ。そんな経験、しようと思ったってなかなかできないんだから。」

こんな励ましの言葉の後に、「すぐに瞑想に入って彼女の魂をバルドーまで追いかけてポアを行なってくださった」と後にサクラー正悟師から報告を受けたときは、もう言葉がなかった。

報酬を要求するわけでもなく、弟子が苦しんでいるとき優しく手を差し伸べてくださる尊師の存在がこれほどまでにありがたく思えたことはない。その前後、知人たちから多くの励ましの言葉を受けたが、本当に心を安らがせてくれたのは、このときの尊師の優しい言葉、バルドーで不安がる彼女の前に現われいち早く次

の転生先へ導いてくださった尊師の優しさ以外の何ものでもなかった。
そして、彼女の葬儀の日、「人間は死んだらどうなるのですか?」とのわたしの質問に、「わたしどもの教えでは死後仏になる修行を行なって召されることになっていますが、実際はわかりません……」と真顔で答えていた僧の姿を思い出す度に、わたしはオウム真理教に入信して本当によかったとホッとさせられるのだった。

◉決断

ところで、彼女の死は、ふらちなわたしの修行に対する考え方に少なからぬ影響を与えてくれた。以後、彼女の幻影に苦しめられ、悔やんでも悔やみきれない不幸な人生を呪う日々が続くが、一方で、急に身近な存在になった〝死〟について真剣に考えざるを得なくなっていた。そして、そのとき心に芽生え始めた求道心のようなものは以後少しずつ大きくなり、幸いにも眼前に存在していた真理に

対する欲求は日に日に募っていくことになる。

このとき、真理の教えの根幹をなしている、「無常なるがゆえの苦」とはどういうものか初めて心から理解できた。そして、実際に目の前で大切な人が死ぬのを見なければそれに気づかない人間の愚かさもわかった。また、死の大軍の前にはこの現世での幸福もいっさい無効で、地位や名誉、ましてお金さえも何の役にも立たないのもわかった。

実際のところ、唯一、死の前で有効なのは修行の経験だけなのである。数多くのイニシエーションを受けた彼女が、バルドーで尊師を強く意識できたことで済度していただいたように、バルドーでの案内役になってくださる生死を超えたグルとのパイプをひたすら太くするしかない。加えて、解脱することで、悟ることで、平静な心の状態で死というものを迎えられたらきっと最高だろうと、このとき真剣に思わされた。

(それに解脱してれば、悟っていれば、わたしのような立場に追い込まれても彼

女の死も冷静に受け止められるに違いない。こんな苦しみを感じなくてすむだろう。そうだ解脱しかない。悟るしかない。このまま現世にいたって一生この傷を引きずっていかなければならないじゃないか。失うものは何もない。壊れることのない最高の幸福とやらを求めてみようではないか。)

いつしかこんなことを心の中で呟くようになっており、出家を決意するまでにそれほど時間はかからなかった。

九一年三月一日、わたしはすべてを捨ててオウム真理教に飛び込んだ。尊師の存在を知ってから二年余り。もう迷いはなかった。

◉疑念を超えて

ただ、そこに至るまでには紆余曲折がなかったわけではない。彼女の死を「シヴァ大神の祝福だった」とおっしゃった尊師の答えに、当初は少なからぬ反発も感じはした。今考えれば、安住しきっていた二人の環境を壊すことでお互いの修

行を進める、というのはすごく合理的なことだとわかる。が、二度と立ち直れないくらいの強い精神的ショックに悶え苦しんでいた当時、それを祝福と考えることそのものがわたしには理不尽なことのように思えたのである。

ところが、疑念にさいなまれる度に尊師はわたしを本当にうまく引っ張ってくださった。

「だいぶストレスが抜けてきたじゃないか。」

「今回は本当にいい経験をしたな。」

シークレット・ヨーガの度に尊師が声をかけてくださると、その瞬間、不思議と悲しみが消えた。

ときには「ヴァイブレーションが悪い」とクンダリニー・ヨーガの成就者の方を自宅まで出張させ、間接的にアドバイスを送ってくださることもあった。また、杖のイニシエーションや永代帰依祈願、シークレット・ヨーガを通じて直接のエンパワーメントも多々していただき、その甲斐あってかわたしのストレスも徐々

に昇華されたようだった。

それは日々の修行についても同じである。この事故を含めてすべての出来事を真理の視点で肯定的に見つめることが再起のために、人生の再スタートのために絶対不可欠だったが、法が根づいていないわたしの無智な状態を見るや、ひたすら教学とマントラなど基礎固めの修行を与えてくださるなど、尊師の指示はすべて理にかなったものばかりだった。

結局、出家後も二カ月の間、黙々とこの課題に励むことになるのだが、この土台の修行がなければ今のわたしの状態はおそらくなかっただろう。もしかしたら、次から次へと押し寄せてくる疑念の前に抗しきれず、そのまま悪趣へと転生する道を真っすぐに突き進んでいたかもしれないと考えるとゾッとさせられる。

◉待ちこがれた極厳修行

こうして迎えた出家生活で、わたしは約二カ月間の基礎修行の期間を経て、編

集部に配属されることになった。オウム真理教の出家者たちはだれしも徳行の実践のために教団への奉仕活動を行なうことになっているが、まさに自分の能力を活かせる最高のセクションに思える。

この編集部というのは教団機関誌や対外向けの出版物を制作する部門で、わたしが来てからしばらくして大幅なテコ入れがなされ、名称も広報編集部に変更されて活発な活動が始まった。それこそ多忙極まりない毎日だった。が、この忙しさはわたしにはむしろ好都合で、爆発的な出版ラッシュの中、何もかもすべてを忘れて半年間、ひたすら徳行に没頭させてもらった感がある。

修行の話が持ち上がったのは、そんな多忙極まりない生活を送りながら、ストレスもいよいよ頂点に達した九一年十二月のことである。クンダリニーのエネルギーによって潜在意識が出始め、いよいよペンも走らずに大スランプに陥り、自分でも「もう限界だ」と思えたころ、タイミングよくちょうど始まった極厳修行に入れてもらえることになった。それもグルが「四十名入れて四十名成就させる」

とおっしゃった最高の極厳修行にである。
修行メニューは秘儀瞑想十時間、調気法六時間、経行四時間、究竟の瞑想三時間。一時間の食事を除いてひたすら修行という超ハードスケジュールである。以下は喜々としてこの極厳修行を迎えたわたしの日記の抜粋である。

◉飛躍的に高まる霊性

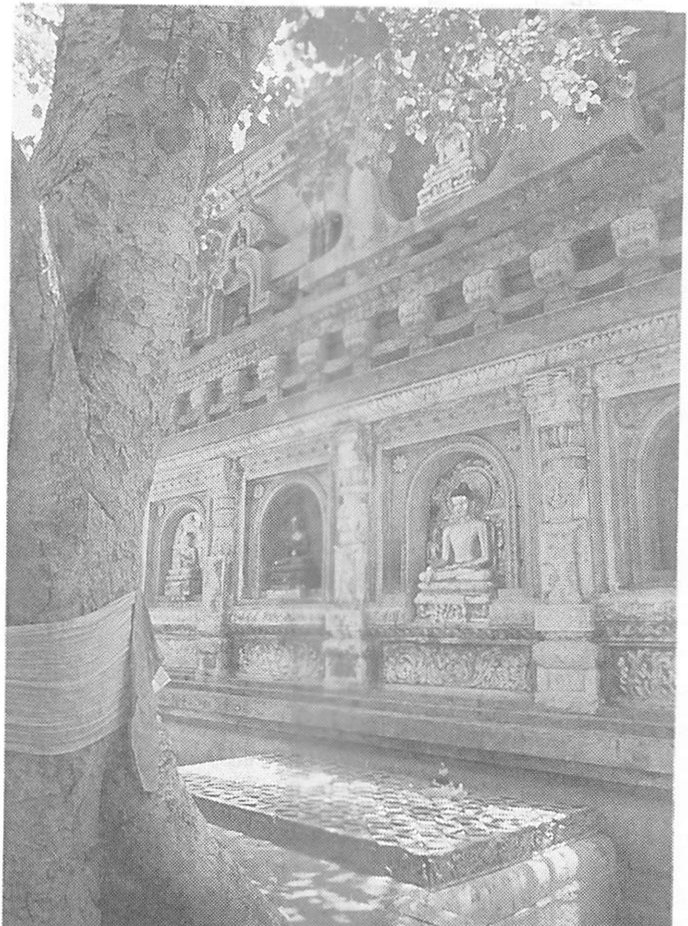
◆十二月十八日

修行に入って三日め。尊師が瞑想されている部屋の下での修行だけあって、とにかくヴァイブレーションがすごい。出家してから止められていた神秘体験が一気に噴き出すように始まったとさえ感じさせる。蓮華座を組みながら瞑想をしてると、周りの空間がゆらゆらと揺れているようで別世界にいる気分である。
今日も究竟の瞑想中に右側から金色の光球が現われ、すごい勢いで左目に飛び

込んできた。ただ、そんなちっぽけなものではない、すごい強い光が常に近くにあるように思えるのだが、それが見えそうで見えないのが歯がゆい。全力でやるしかない。
現世捨断のために食事は二日に一回ごく少量を取ることにして、また、断水することにした。

◆十二月二十日

グルのアドバイスどおり喜覚支に徹していると、修行が楽しくて、うれしくてしょうがない。究竟の瞑想に入るだけでいろんなヴィジョンを見たり、いろんな体験をさせていただいていることがその喜びをいっそう大きなものにさせているのだろう。よく尊師がおっしゃっていた「すべては心の現われ」という言葉の意味がよくわかったような気がする。
修行に入ってからは横になって寝ることもできないし肉体的にはつらいが、精



神的にはすごく楽な状態。心が肉体に打ち勝っている状態とはまさにこのことをいうのだろう。

◆十二月二十三日

「究竟中に意識が飛ばされるのは情報に弱いからです。そう認識しなさい。」

毎日様子をうかがいに顔を出してくださる尊師から厳しい指摘を受ける。究竟中、背中からバッと化身が抜けているのはわかるのだが、その時点で意識は飛ばされてどうしてもついていけないのである。「絶対に飛ばされないぞ」と何度も決意する。

◆十二月二十八日

究竟中、グルと問答をしているヴィジョンを頻繁に見るようになる。それだけグルが意識できていていてパイプが太くなっている証拠かもしれない。また、身体が

ふわふわ宙に浮いているようで、同じく究竟中に後方に飛ばされるようなダルドリー・シッディも頻繁に経験するようになった。

◆十二月三十一日

修行に入ってからすごい集中力がついている。ツァンダリーの詞章のとき、三時間雑念がいっさいわかないすばらしい状態を経験させてもらった。煩悩の捨断の方法（コツ）がなんとなくわかったような気がする。それは集中プラス念の力に他ならない。意識の連続もはっきりと自覚でき充実した最高の気分になる。

◉クンダリニー・ヨーガの成就に向かって

◆九二年一月一日

クンダリニー・ヨーガの成就の条件であるダルドリー・シッディ、光の体験、

化身の体験、そして、意識の連続は一応そろった。ただ、そんなことを考えていたら慢が生起してきて、分化した意識がヴィジョンの中に飛び込んで遊び始めてしまった。「体験はそろってるんだからいいんだよ」と思いながら法友たちと遊んでいる意識と、それを眺めながら「どうしようもないな」とあきれている二つの意識。両者ともまぎれもなく自分のものである。一時間ぐらいしてようやく後者の自分が前者の自分を呼び戻しにいくが、再び意識が合一したとき不思議な気がしてならなかった。ちなみに、言葉で表現するのは難しいが、このとき生起した慢はナーディーのけがれとして視覚的に見えた。

この日、ウマー・パールヴァティー・アーチャリー正大師からイニシエーションをいただくヴィジョンを見たが、その直後にパンのイニシエーションがあった。予知能力も徐々についてきたようである。

◆一月二日

覚醒した状態が続く。ちょっとでも気を緩めようものなら異世界に飛んでしまいそうな、エネルギッシュな状態である。修行が進んでいるのを実感した。ただ、その一方で家族や友人が頭の中に出てきて困惑させる。深い潜在意識のデータが出てきたのだろう。喜覚支がなければ逃げ出したくなるような、そんな状態でもある。「早く心を真理の生活一本に決めたい」と強く思う。

修行中に出てくるものは日々記憶修習したものばかり。これに気づいて日々データの入れ替えを行なっていればもっと楽に修行できたのに、と後悔の念も出てくる。日々どれだけデータを入れ替えられるか、今後の課題だと思った。

◆一月三日

自分についていろいろと思考する。今日も経行中、家族への情、プライドのことなど考えていた。すると第二サティアンに戻る直前、これらの煩悩について思

索をしているうちに抜けたかと思うと、その瞬間、空がピカッと光り、心が止まった。心の寂静、あるいは不動心というのはこのことだろう。いかなる場面でもこのままの状態を保てたら本当に幸福だろうなと強く思った。

その後のヴァヤヴィヤ・クンバカ・プラーナーヤーマでは、自分だけが特別な空間にいるような感覚に。自分だけがスローモーションで動いているように時間が経つのが早く、また、周りの光景はすべてが幻影のようにゆらゆらとして見える。クンバカの時間が一気に伸びた。

◆一月五日

修行に入ったときから思っていた、早く成就をしたい、成就の認定を受けたい、という焦りが抜けた。エネルギーの昇華による物理的な変化によって瞬間的に感情がガラッと変わるのを実体験できて、なにやらリラックスした気分になる。これがクンダリニー・ヨーガの煩悩を昇華するプロセスなのだろう。

プライドが完全に抜けたようである。成就者としての認定より、この静かな境地に到達したこと、それだけでうれしかった。そして、同時に、「みんなこの境地に達すれば楽になるのに」と思い、強い救済意識が出てきた。

◆一月六日

心の波がなくなってきた。煩悩の昇華と同時に心が止まるプロセスを経験。また、ツァンダリーの詞章を読んでいるときなどに、肉体の感覚がなくなったり、異世界の光に没入している状態を何度か経験するようになった。ちなみに、今川も右上からキラキラと光る黄金色の光が差し込んできて、わたしの身体を優しく包み込むのだった。

究竟中、白銀の光に包まれたり、また、ヴァヤヴィヤの最中、周りが黄色い空間になったり本当に日々不思議な体験ばかりだが、むしろ今の心境からすればこちらが本当の世界で、それまでの二十数年の現世での生活の方こそ幻影に思えて

きた。
思考を始めるとすぐにアージュニャー・チァクラにエネルギーが集中し、直感的に分析する力が鋭くなってきたのがわかる。気がつくといろんなことについて真理の視点から考えていて、その度に新しい発見があって面白い。

◆一月十二日

運動欲求がほとんどなくなってしまった。身体を動かすのもつらい。このままずっと瞑想していたいとつい思ってしまう。
そのことを尊師にお話すると、
「それは究竟に対するとらわれである。どんなものにも心が動かないようにしなければ駄目だ。」
と、お叱りを受けてしまった。さらに、アナハタの詰まりが抜け、スヴァディスターナとヴィシュッダが浄化されてきていると指摘を受ける。

◆一月十六日

捨断の瞑想に入って三日目。心が安定しいろんな考えが浮かんでくる。経典を読んでいると次々と新しい発見があって面白い。心がどんどん固まっていくような、そんな感じである。ただ、今は形而上での安定であり、これが現世に戻ったときどうなるか。次の教学のステップでさらに固めなければと思う。

◉心惑わすデータを分解

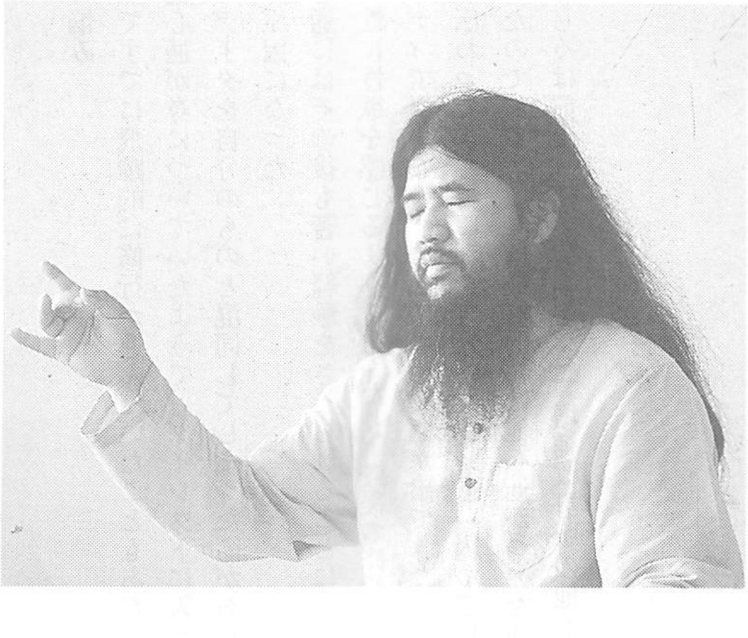
この後、規定の教学修行を終わらせたわたしは、一月下旬から立位礼拝六百時間の修行に入った。ここまでの約一カ月の修行は確実にステージアップに結びついたようで、下世話な煩悩的なものに全く心が動かない、安定による幸福感を与えてくれた。

しかし、グルが意思していたことを思えば、この程度はだれでも容易に到達できるもので、本当の修行はここからだったのかもしれない。帰依を培う立位礼拝

の修行に入ってしばらくすると、次々と出てくる心惑わすデータの前に、心の安定がぶち壊されるという体験をし出したからである。そのデータの一つ一つを真理の法則にのっとって分解、あるいは捨断しながら再び心の安定にたどりつくのだが、この気長な繰り返しこそ心をさらに強くしていく最も価値ある修行だったような気がしてならない。

食べ物、仕事、両親や友人、彼女との思い出……、この立位礼拝の間に出てきたデータは実に様々だった。それまで現世で修習してきたものがすべて出てきたといっても過言ではないだろう。

もちろん、頭では真理の実践を続けることこそ自分を本当に幸福へと導いてくれるものだとわかってはいた。が、真理の道はまさに未知なるもので、想像できないものへと変化していく自分に対する一抹の不安が再び迷妄へとわたしを走らせようとした。そのデータを分解、あるいは捨断してひたすら詞章に集中する修行は、文字どおり帰依の修行になった。



◉神通力者ゆえの悩み

また、この時点ですでに飛躍的に修行が進んでいたこともあだになった。人の心を理解できる他心通が身についていたようで、ダイレクトに入ってきた周りの修行者の苦しみのデータを自分のものと混同してしまった節があり、それがいっそう心を苦しめる原因になった。

実は、この他心通にはその後も苦い経験をさせられることになる。極厳修行の最後の段で隣の女性に性欲を感じるようになったり、最後の修行となったアンダーグラウンド・サマディで嫌いなはずのケーキや饅頭（まんじゅう）が出てきたり、接した人間の気持ちがそのまま伝わってきて、これを自分のものと思い込んでしまったために悩まされてしまったのである。これは最終的には他心通（たしんつう）がついたゆえの悩みとわかるのだが（※詳しくは前出・『生死を超える』増補改訂版の他心通の体験談を参照）……。

（これは経験の構成でわたしの本質ではない。こんなものにとらわれてはいけない。わたしの本質は真我である。そんなものにとらわれるから苦しみの愛欲界を転生し続けなければならないんだ。よし、この幻影から離れるぞ。）

これらの下位の世界に結びつけるデータが出てくる度に、何度こんな思いが頭を交錯しただろうか。それはある意味で落下のプロセス、意識の堕落を楽しんできたゆえにこの苦界を転生し続ける、根本無智との闘いだったかもしれない。

ただ、その甲斐あって立位礼拝が終わるころには一方で、事象を真理の法則で測り、たいがいのことには動かない強靭な心が培えたことも確かである。

◉克服

ところで、今回の修行では彼女に対する思いも完全にふっ切れた。深い潜在意識に根づいていたデータに悩まされることもあったのは事実だが、それも「死生観について考え直してみたらどうか」という尊師からのアドバイスによって意外

なほど簡単に克服することができたのである。

ちなみに、今回の極厳修行中にわたしが〝死〟について出した結論はこんなものだった。確かに、一般人の死なら悲しむべきもの、哀れむべきものに違いない。真理を実践してこなかった迷妄なる魂は煩悩破壊に導かれることなく、バルドーでも自己の煩悩に振り回され、カルマのままに転生するしかない。まして殺生を肯定し、娯楽など動物的要素を修習させるこの現世に生きてきた魂がどこに転生するか、それは想像に難くないことでやはり悲しむべきことに違いない。

しかし、修行者にとっての死は、いわばその瞬間を境に高い世界に至るための儀式のようなもので、むしろ祝福されてしかるべきものなのである。実際、彼女は死を境に尊師にポアされ、この人間界でさらに修行環境の整った素晴らしい人生を歩み始めたそうである。その魂の本当の意味での幸福を考えるなら、それはむしろ喜ぶべきものなのである。

思い出という幻影に苦しんだ末に、そう心から思えたとき、わたしの中にもう

迷いはなかった。そして、〝死〟というもので二度と悩むことはないだろうと強く思うのだった。

◉新たなる旅立ち

「今日この瞬間をもって極厳修行班は解散となります。全員、修行に入る前の部署に戻ってください。」

九二年三月三日、極厳修行班はロシア救済ツアーのために、突然、解散を命じられた。あと二日で正師の規定である修行（四つの瞑想法、教学、立位礼拝）を終えようかという矢先のことだった。全く予期せぬことにさすがに驚きはしたものの、不思議とショックは全くなくむしろ心は晴れ晴れとしていた。

（確かに成就の判定は得られなかったが、こんなにも心は安定しているじゃないか。それだけで今回は十分満足じゃないか。）

そんな気持ちでの指示どおり広報編集部に戻ると、しばらくしてから「修行に

戻って規定のものを終わらせなさい。ロシアからわたしが戻ったらアンダーグラウンド・サマディだ」との尊師の指示が届いた。今考えれば、心を試されていたのかもしれない。が、いずれにしても、わたしにはうれしい特別措置だった。

そして、アンダーグラウンド・サマディを終えたわたしは、晴れて三月二十六日付けでクンダリニー・ヨーガの成就と認定された。最後は、四日間のサマディ直前にロシア救済ツアーに参加するおまけまでついたが、尊師を一〇〇%信頼しきっていたわたしにはツアー直後の限られた酸素量の中での四日間の断水断食の修行も取るに足りないものだったことはいうまでもない。

初めて麻原尊師の名前を耳にしてから三年余り……。今わたしはクンダリニー・ヨーガの成就によって生れ変わり、新たな人生を歩み始めた。途方に暮れたどん底の生活から尊師に引き上げていただいたように、今度はわたしが救済する番である。そして、このわたしの体験談に触発され、一人でも多くの方が麻原尊師の

もとで修行し、解脱・悟りを得ることができたら幸いである。

（追記）

一九九一年六月三日、九州・島原の雲仙岳の火砕流によって三十人以上の尊い命が犠牲になったのは、皆さんの記憶にも新しいところだろう。この事故を報じる新聞記事の死者・行方不明者の欄に友人のS君の名前を見つけたのは、この三日後、阿蘇・波野村のシャンバラ精舎から帰るバスの中でのことだった。

S君はテレビ朝日の敏腕記者で、このときも雲仙岳の火砕流のレポートのため、果敢にも火砕流の流れを正面から撮れる場所でカメラマンと共に取材している最中だった。この事故を報じた雑誌記事によると、熱と煙の恐怖の急流に飲まれて瞬間的に焼けた遺体はまるでマネキン人形のようだったということである。享年

二十八歳、あまりにも若すぎる死だった。

彼女の葬儀にも駆けつけてくれた彼は、その直前に結婚したばかりで、わたしのところと同じように結婚してからおよそ半年目の悲劇である。記者仲間たちが開いてくれた励ます会の席で、「おまえも気をつけろよ」と精いっぱいの悪態をついたわたしの言葉に、申し訳なさそうに声もなく笑っていた姿が今となっては懐かしい。

全身に大火傷を負っての死にざまは、お世辞にも立派な最期とはいい難い。どこに転生したか、今ならともかく成就前のわたしには知る術もなかった、が、最期の姿から想像するにそういい転生は期待できまい。

それはともかく、出家の身ゆえ、葬儀にも駆けつけることもできなかったが、彼の奥さんの落胆ぶりを想像すると、同じ境遇を経験した者としてはつらかった。ある程度真理の法則を知っていたわたしでさえ発狂寸前にまで追い込まれたことを考えれば、おそらく真理を知らない彼女のショックは推して知るべしだろう。

（いったい彼女はS君の死をどう受け止めたのだろうか……。もし尊師に出会っていたら、真理を知っていたら救われるのに……。）

そう考えると、生前、酒の席でのわたしのオウム真理教弁護の発言を「なるほどもっともだ」という顔で聞いていた彼に、どうしてもっと真剣に真理施をしようとしなかったのか悔やまれてならない。そうすればおそらく結果も違っただろうに……。

彼の事故を思い出す度に、一人でも多くの人に真理の法を伝えなければと強く願わずにはいられない……。

COLUMN—2

◉六神通

・神足通（じんそくつう）

空中浮揚やテレポーテーションを行なったり、高い世界へ飛んだりすることのできる能力

・天耳通（てんにつう）

神々の声を聞いたり、普通の人間なら聞くことのできないほど遠くの音を聞いたりする能力

・他心通（たしんつう）

他人の心を知る能力

・宿命通（しゅくみょうつう）

前生を知る能力

・天眼通（てんげんつう）

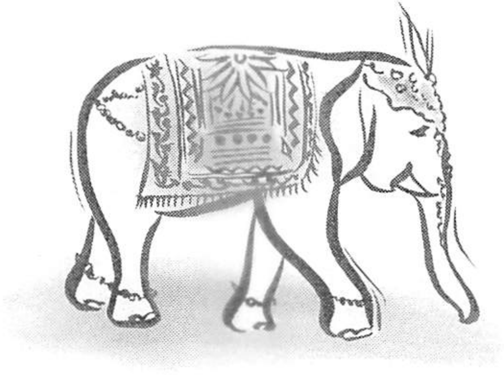
一般に遠隔透視能力といわれているが、これは北伝系仏教の間違いであって、実際には南伝仏教のいう死生智（ししょうち）のこと。

死生智とは転生先を知ったり、生きながらにしていろいろな世界とつながる能力

・漏尽通（ろじんつう）

完全なる絶対なる神の叡智（えいち）

仏教では、修行を行なうことによって、これら「六神通」と呼ばれる神秘的な力が身につくとされている。
この「六神通」について詳しく知りたい方は、以下の本を参照していただきたい。
『超越神力PART1　天耳通・他心通』『超越神力PART2　前生を知れ！死生智の秘密』『超越神力PART3　完全なる絶対なる神の叡智、漏尽通』
（いずれもオウム出版・麻原彰晃著）



聖者への道

聖者バッダヴァーチャーナンダー到達光正師

◉呼吸が止まった！

クンダリニー・ヨーガの成就を科学的に判定する「アンダーグラウンド・サマディ」――。これは地中に埋められた一辺三メートル余りのチェンバー（小部屋）の中で、四日間以上、断水断食の状態で過ごすという過酷な修行である。外界といっさい遮断され、常人ならわずか二日程度で死に至らしめられる限られた酸素量しかないチェンバー。加えて、この恐怖の空間はバルドー（死後から次の転生に至るまでの中間状態）に酷似しており、深い潜在意識に根づいていた煩悩が次から次へとヴィジョンとして、データとして現われては心を悩ませる。

もし修行経験が全くない人がこの四日間のアンダーグラウンド・サマディに挑戦したとしたら……。おそらく、一日と経たないうちにギブアップするか、あるいは無理して続けたとしても恐怖のあまり発狂するか、酸欠のため死に至らしめられるか、いずれかの結果しか得られないのではなかろうか。

四カ月に及ぶ過酷な極厳修行を経てクンダリニー・ヨーガ成就のための最後の修行アンダーグラウンド・サマディに挑戦したバッダヴァーチャーナンダー正師は、このチェンバーの中で自己の煩悩と極限の闘いを繰り広げていた。いつしか深い深い潜在意識に没入した極厳修行中も、次から次へと出てきた煩悩に悩まされながらも決してグルから定められた規定量を上回ることはなく、持ち前の不放逸によってひたすら抑えてきた食への渇愛。自分ではとうの昔に克服したはずと思っていたその食の煩悩が、チェンバーに入って二日と経たないうちに様々なデータとして猛烈な勢いで現われては心を苦しめるなど全く予想だにできなかったことだった。

(初めは光が見えていい調子だったのに……。ちょっと気を緩めたらもう食のデータばかり。それならばと「食を滅する瞑想」をひたすら行なっているのに、どうしてこうなっちゃうんだろう?

そういえば一カ月前に極厳修行班が一時的に解散になって、再び集合の声がか

かるまで経行教学修行班で頑張ってたときから急に食に対する渇愛が出てきたように思えるけど……。もしかしたらそのとき、周りの人の煩悩のデータが入ってきたのかな。

ええ、まさかそんなことないか。わたしにそんな力があるわけないし、これってやっぱりわたしがもともと持っていた煩悩なんだ。あんなに頑張って修行してきたのに……。まだ食にとらわれているなんて、本当にわたしってだめなやつだわ。)

もっとも、冷静に考えてみれば、その食の煩悩のデータが自分のものでないことはわかったはずである。食べることそのものへの渇愛はともかく、チェンバーの中で見るヴィジョンはつい首をひねりたくなるものばかりだった。現世のころから一度として欲したことのない料理に対する渇愛が生じたり、とても自分の煩悩とは思えないものも多々あったからである。

が、この極厳修行に入る直前に麻原尊師がおっしゃった、「今回の修行で六神

通を身につけさせる」という言葉が頭をよぎったものの、まさか自分にそんな能力が身についていたとは思えず、他心通で知った他人のデータを自分のものととらわれていたとはそのときの彼女には思いもよらなかった。そして、「自分は本当にだめな人間だ」とつい卑屈になってしまうのは、彼女のそれまでの人生が自他ともに認める〝平凡〟そのものだったせいなのかもしれない。

（どうしてこんなに食に苦しめられなきゃいけないの。ええい、もう考えるのも面倒くさい。チェンバーの中だってかまうものか。このまま寝てやれ。）

次から次へと襲ってくる食の煩悩にまともにぶつかっても抗しきれず、とうとうこう開き直ったのはチェンバーに入ってちょうど三日目のことだった。

しかし、その瞬間、驚くべきことが起こった。目を覚ますまでの約三時間、酸素計測機は微動だにすることがなかった。つまり、この瞬間、サマディに入り、彼女の呼吸は完全に停止していたのである。いにしえの聖者たちの奇跡として現

代に伝えられているサマディ。彼らが深い瞑想状態に入ったとき、呼吸も心臓の動きさえも停止してしまうといわれているが、彼女自身がそのサマディの奇跡を証明してくれたわけである。

厳しい修行の末にクンダリニー・ヨーガを成就したバッダヴァーチャーナンダー正師。どこにでもいるような〝平凡〟な人生を歩んできた彼女は、麻原尊師の指導のもと、オウム真理教の修行で確実に変わり、この日、〝聖者〟の仲間入りをした――。

◉平凡な生活

本人が言うとおり、バッダヴァーチャーナンダー正師の人生は本当に〝平凡〟という言葉がぴったりだった。

一九六六年三月、名古屋生まれの岐阜育ち。三人姉弟の長女として育った家庭は両親共に健在で、岐阜県土岐市でレストランを経営していた。平凡な家庭に



育ち、出家を果たすまでの二十数年間、ほとんどこの土岐市の自宅で過ごしていた。

「父は若いころギャンブルが好きで、本人が『家一軒建てられるぐらいのお金をすった』と言ってるぐらいですから家はそんなに裕福ではありませんでした。それでも小学校のころまではペン習字、オルガン、エレクトーン、ピアノなど人並以上の習い事もさせてもらえました。でも高校生ぐらいになると借金の返済が大変だったようで、学校で必要なお金も気を使って請求できないような、そんな雰囲気でした。母が何でも隠さずに話す人でしたから、逆にこちらが気を使ってしまうんですよね。もう小遣いなんてとんでもないという感じでしたよ。

で、推薦で短大に入学することはしましたが、やっぱり家に負担をかけたくないと思って三カ月で退学。初めから予想していたことでしたけど、やっぱり悲しかった。父親と喧嘩する度に、いつもその話を持ち出してましたから。最後は郵送で退学届けを出したわけですが、なんとまあ呆気ないものでしたよ。」

淡々と人生を振り返る彼女だが、それなりに苦悩がないわけではなかった。母の教育方針で私立に通っていた幼稚園時代——。そのせいか近所に友人ができず、いつも一人で遊んでいたという。一人ままごと、一人人形遊びなどはもう日常茶飯事。また、早生れだったせいもあって体が小さく、小さいころからよくイジメに遭ったのも彼女を一人遊びに走らせた原因かもしれない。トイレに閉じ込められたり、悪口を言われたり、仲間外れに遭ったり小さいころは本当によくイジメられた。今となっては「よっぽどカルマが悪かったみたい（笑い）」と軽く流せるが、当時の彼女には深刻な問題だったようである。

「それで自分に自信が持てなくなってしまったんですよ。すごく暗くて下を向いているような子で、周りから『もっと上を向いて歩いたら』といつも言われていました。家がボロかったのも一つの原因でしょうかね。父が全然頓着しない人で、ガラスが割れてもテープで止めとくだけのような状態でしたから。近所でも一番古くさいボロ屋だったんじゃないでしょうかね。恥ずかしくて友人も呼べなかっ

たような、そんな記憶があるくらいですから。」
が、そんな環境にもめげず、真っすぐに育っていった彼女。それはお互いに何でも隠さずに話せる、友人のような母の温かい愛に見守られていたせいかもしれない。

◉オウム真理教との出会い

そして、求道心のかけらもなかった彼女が宗教の道に入っていくのも、結局はその母の影響だった。

道を求め続け、読みあさるように精神世界の本を探していた母。一緒に買物に出かける度に「ちょっと待ってて」と本屋に駆け込んでは、「今日はいい本なかった」「今日はすごく面白そうな本があった」と一喜一憂する母の気持ちは彼女には全く理解できなかった。が、そんな母からの誘いは不思議と断われなかった。

「ちょっと一緒に行ってみてよ。」

近所の友人に熱心に誘われてすでに興味津々の母に誘われるままに『Sの家』や『R会』などの集いについて行ったこともあった。しかし、期待どおりのものがなかなか見つからずにいつもがっかりしている母の姿を見ると、「そんな世界に救いを求めたってどうしようもないのに」と思わざるを得なかった。まして、信仰心を深めるための集まりとは名ばかりで、集会の度にお互いに悩みを話し合い、何の解決策も見つからないままに傷口をなめ合っているような人々の暗い姿を自分のその目で見るにつけ、「あんなものは、宗教なんてものはわたしとは無縁のものなんだ」と心の中で叫んでいるのだった。

しかし、その母が努力の甲斐あってついに長年求めていたものに出会った。一九八八年三月のことだった。やはり精神世界に興味を持っていた一つ下の弟が麻原尊師の著書『マハーヤーナ・スートラ』を下宿先の近所の本屋で見つけ、それを母に話したのがきっかけとなったのである。

「すごく気になる本があるんだけど、お金がなくて買えないんだ。」

弟からそんな連絡を受けるや、母は心を駆り立てるものがあったのか車で二時間かけてその本屋に駆けつけた。そして、弟から教えてもらった本を夢中になって読みあさっているのだった。

「これだ。わたしの求めていたのはこれだったんだ。」

わけもわからず彼女をつかまえてうれしそうに話す母。結局、いつものように母の頼みでオウム真理教の入信申込みにわざわざ名古屋までついて行くことになるのだが、すでに宗教に嫌気がさしていた彼女はいくら母に勧められてもとても入信する気にはなれなかった。

◉愛と愛着は違う

しかし、ほどなくして自然と転機が訪れるから、やはり彼女も前生からの修行者だったのだろうか。それまで楽しいはずだった現世の生活が、母の入信をきっかけに一転して苦しみに変わってしまうから不思議である。

聖者への道



「おそらく母が修行を始めることで、その側にいたわたしのカルマの返りも早くなってしまったのでしょうね。それまで男の人を真剣に好きになったことなんてないのにある男性に大恋愛をしてしまって、もう大変だったんですよ。」

事の顛末を簡単に説明するならこういうことである。短大を中退するや、電気ショップ、喫茶店などのアルバイトを経て、とあるディスカウント・ショップに就職した彼女。素直な性格が気に入られたのか、たくさんの異性から好かれるようになったが友人程度のグループ交際を脱する相手は現われなかった。ところが、この前後、初めて心底好きになってしまった男性が登場。が、これが仲のいい友人の恋人だったというから話がややこしくなった。

「友人もその彼とつきあい始めたころから、『最初のイメージと全然違うのよ』と不満があるようなことを言ってたんですよ。それで最初のうちはその彼に同情してたんですが、そのうちにその同情が愛情に変わって段々と好きになってしまって……。でも、相手もひどいんですよね。こちらが好きだということが薄々わかっ

ていて、それで『一緒に遊びに行こう』とか誘ってくるんですよ。わたしとしては当然うれしいからついて行きますよね。そこから苦悩が始まりました。」

このころはもう悩んで悩んで眠れないどころか食事も喉を通らなかった。精神的にも不安定で、つい周りに当たり散らしてしまい、そんな姿を見かねた母から、「精神病院にでも行ってこい」とか「そんなふうに他人に当たっても解決しないよ。自分で解決しろ」などと一喝された。友人以上に何でも気軽に相談できた母ならではのアドバイスだろう。

「で、いろんな話をした末に、母から『オウム真理教に入信しろ』という話になったんですね。真理の法を学べば、自分のやっていることがいかに無意味なことか理解できるだろうということで。でもわたしとしてはそのころはまだ現世が楽しいと思ってましたし、入ってしまったら抜けられないような気がして……。それで結論を先延ばしにしていたんですが、ぐずぐずしてたら母から『銀行に行って入会金を降ろしてこい！』って怒られて、それですぐに入信したわけです。ただ、

そこで成就者の方に今までの悩みを相談して最終的には解決策が得られましたから、後から考えてみれば入信して本当によかった、ということになりましたけど……。」

そのときの解決策というのはおおむねこんなものだった。初めこそ彼を自分のものにしたいという気持ちが強く働き、そのための方法をあれこれ考えていたが、麻原尊師の説法を読むうちに徐々に心が変化。愛というのは本来、相手を育むもの、相手の成長を促進するもの、それを見て喜ぶ心である。ところが、今自分が相手に望んでいたものはそばにいたい、とか一緒にいたいとか、自己のエゴをいかに満足させるかといういわば愛着である。そのような愛着を持っている状態では対象を正確に見れないし、冷静に見れるわけがない。愛と愛着は違うんだということを理解し、もし相手を愛しているんだったら愛の実践をしよう——というように徐々にではあるが気持ちが変わっていった。

「でもだめなんですよ。頭ではわかっているんですがふっ切れなくて、どうして

も自分のものにしたいというエゴが生起して、それがわたしを苦しめるんです。入信してからもやはり同じような状態が続いて、それで夜眠れなくて、夜中に名古屋支部の大師に電話するようなことを繰り返していました。」

◉真理一筋の生活へ

結論からいえば、やはりこの恋は実らなかったということになる。いったんはその彼も「あの娘とは別れて君とつきあいたい」と心を動かしてくれたが、友人からの「もう一度やり直したい」の言葉に再び心を動かされ、三人の関係はいよいよ泥沼に突入。話し合いの末に、彼女が身を引くことにしたわけである。

「でも最後はもうオウム真理教の教義もだいぶ根づいてましたから、そんなに苦ではありませんでした。いつ捨てられるのかもしれないという不安もあってつきあっていても全然楽しくなかったし、そんなことばかり考えていましたから別れることができてかえってサバサバしてました。真面目な話、このころになると食

欲もあったし、夜もよく眠れたし、不思議と心が安定してましたからね。まあ、その彼が同じ会社でしたから、そういう意味では毎日顔を合わせなければならないし、ちょっと嫌な感じもありましたけど、それも最後はほとんど気にならなくなりました。わたし自身、強くなったんでしょうね。」

そのころになるとむしろ彼女の興味はオウム真理教の教義に向けられていた。矛盾のない世界観、そして、すべての疑問に対して完璧なまでに答えてくれる体系的な教義、そして、その教義を体験的に証明してくれる成就者の存在。宗教に抱いていたいかがわしくも暗いイメージは完全に払拭され、逆にオウム真理教への興味は募っていくばかりだった。

休みの日には毎週サットプラーナ・イニシエーションを受け、深夜セミナーに五日間連続で通ったこともあった。そして、気がつくと毎日のように名古屋支部道場まで車で通っている自分に気がついた。それもこれも「いいか悪いかやってみなければわからない」との思いからスタートしたわけだが、本物の宗教と実感



してからというもの、オウム真理教の活動に夢中になるまでにそう時間はかからなかったわけである。

「自分ではあまり意識してはいませんでしたが、やはりわたしにも求道心のようなものがあったんでしょうね。高校生のころとか自転車で学校まで通いながら、この道はどこまで続いているんだろう、どうしてわたしは人間なんだろう、人は死んだらどうなってしまうんだろう——などということを漠然とながら考えてましたから。その求道心がオウム真理教に入って修行を始めることで、まさに一気に花開いたという感じでしたね。」

オウム真理教に入ってからもしばらくは、自分には現世的な生活しかないものと思い込んでいた。が、不思議なことにいつしかその現世への興味は薄れ、全く無縁に思えた解脱・悟りさえ意識しているのだった。そして、その末に彼女は父親とも話し合い「頑張ってこいよ」の声援をバックに出家を果たした。ちなみに、このとき彼女以上に道を求めていた母も一緒に出家した。九〇年五月のことであ

る。もちろん、このころにはもう現世への未練など全くなかった。

◉あこがれの出家生活

しかし、あこがれの出家生活は彼女が想像していた以上に厳しいものだった。初めの数カ月間こそ集中的な修行、あるいは支部活動に専念させてもらい、徐々に出家生活に慣れさせてもらっているようなところがあったが、以後、阿蘇のシャバラ精舎に移ってからの二カ月間は生活もハードで、現世で心の甘さを修習してきたゆえに苦しめられた。

このときは一日の半分は修行、半分は奉仕活動を行なうことになっており、彼女もその決まりに従って一日の半分の時間を奉仕活動に費やした。そして、おそらく現世にいたら一生経験できないだろう不慣れなハードワークを与えられ、それゆえに心を動かされ苦しめられたわけである。

「このときのワークはいわゆる建築の仕事なんです。高いところに上って屋根を

付けるために釘を打ったり、基礎工事のために溝を掘ったり、現世にいたらおそらく一生経験できないような仕事をやらしてもらいました。グラスウールの断熱材を扱うのに、細かいガラスにやられないように粉塵マスクなどして全身を防備したり、本当にあんな経験は二度とできないでしょうね。」

もっとも、そうした経験のお蔭で観念が崩れ、以後順調に修行が進むことになるから出家生活においてはどんな細かいこともばかにできない。

その後は、経理の才能を活かして静岡県の富士山総本部道場や東京本部道場の事務の仕事を任されるが、このころになると持ち前の不放逸さから修行が飛躍的に進んでいくのがはた目にもよくわかった。もちろん、それもこれも、麻原尊師からの電話を取り継ぐチャンスが増え、その際にしていただいたいろんなアドバイスをそのとおり実践してきた結果に他ならないのだが……。

「嫌悪が出てるじゃないか。そんなことじゃだめじゃないか。」

「おや、今度はプライドが出ているようだな。」

何気なく電話に出てみると、ときには激しく、また、ときには優しく唐突にこんな言葉をかけて注意してくださる尊師。その後に与えてくださる修行上のいろんなアドバイスが、本気で自己改革を目指していた彼女にとってうれしくないはずがなかった。「どんくさい自分が成長していくためには、グルから言われたことをひたすらやるしかない。自分は他の人たちと違ってグルとあまり縁がないようだし、とにかく今生できるだけ尊師に近づかなければ……。そのためにもグルから言われたことは絶対に実践するんだ」――昔から神秘体験が全くないタイプで、一歩間違えばグルへの信が大きく揺らいでもなんら不思議ではなさそうだが、そんな尊師の優しさに応えるためにも彼女は日々与えられた修行を全力で実践した。

だからこそ、尊師から「最近、嫌悪が抜けてきたじゃないか」「おっ、プライドが抜けたな。どうしてなんだ?」と声をかけられるのがうれしかった。そして、その度に「尊師から言われた修行を全力でやっていますから」と自信を持って答

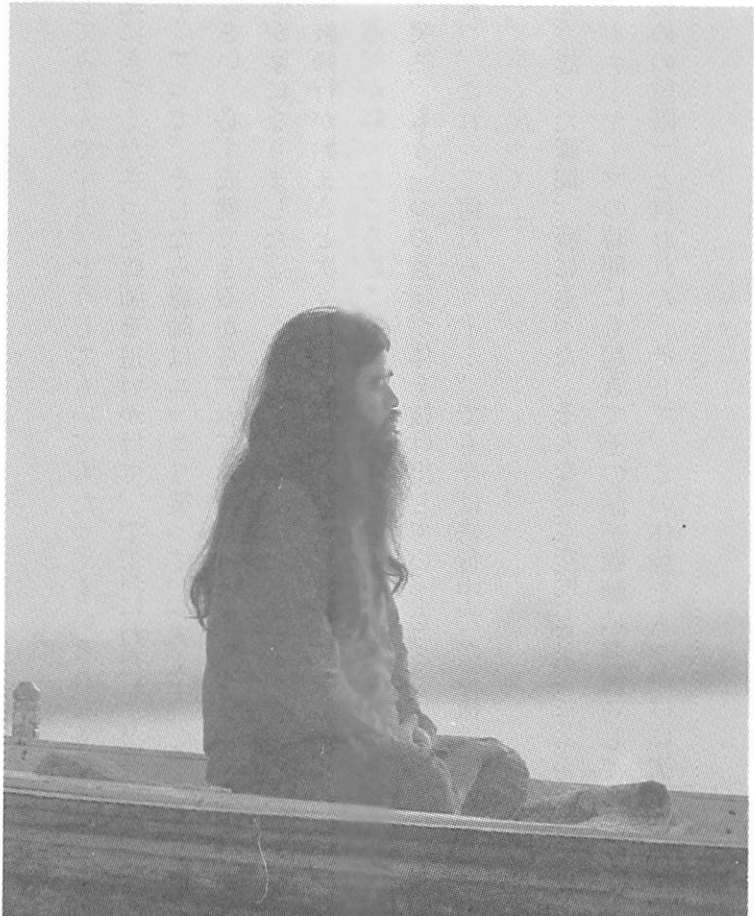
えられる自分が誇らしくもあったわけである。

◉待ちに待った神秘体験

が、そんな修行一途な生活を送ってきたバッダヴァーチャーナンダー正師だったが、クンダリニー・ヨーガの成就に向けた修行はやはり厳しいものがあった。極厳修行のメンバーに選ばれた彼女は忘れもしない一九九一年十二月十五日、およそ四十名の法友と共に厳しい修行を開始した。「四十名入れて四十名成就させる」「六神通を身につけさせる」と尊師が断言した修行である。逆に言えば、それだけ厳しい修行ということで、「この修行で人間を超越していかなければならないんだ」と考えると平凡な人生を歩んできた自分に果たしてそんなことができるものかとつい疑問に思ってしまうのだった。

「とにかく在家のころから全然、神秘体験らしきものがありませんでしたからね。そういう意味でいつもプレッシャーを感じていました。それで一度、尊師にお伺

聖者への道



いしてみたんですよ。どうしてもいてもたってもいられなくなって、修行の様子を見にきてくださった尊師を追いかけて、『本当にわたしも成就できるんでしょうか?』って。そしたら尊師はニッコリ笑って、『大丈夫。ゆっくり構えて修行しなさい。必ず成就できるから』っておっしゃってくださって……。あれで本当に心が楽になりました。」

極厳修行が始まると次々と起こり出した神秘体験にも心が救われた。修行に入って一週間が経ったころのことである。小乗のツァンダリーの詞章を唱えている最中、突然、もう一つの意識が体を抜け出していった。

「えっ、これって何だろう……。でも今は修行中だから抜けていったらだめじゃない。早く戻って。」

そう思った瞬間、我に返った。そんなことが同じ日のヴァヤヴィヤ・クンバカ・プラーナーヤーマの時間にも起きてその話を尊師にお伺いしてみると、「変化身の初めの段階」と言われた。そして、この体験をきっかけに次々と神秘的な体験

を経験することになり、それが励みとなって彼女は修行者としての自信を深めていくことになる。

この修行中、本当にいろんな体験をさせてもらった。経典を読んでいると空間が朱色に見えたり（尊師は阿修羅界の色とおっしゃった）、立位礼拝中に金と銀の細かい粒々（空気中のプラーナ）を見たりと、今まで神秘体験がなかったのがウソのような、そんな毎日だった。また、究竟の瞑想中にもダルドリー・シッディーが起こったり、また、ヴィジョンもリアルで、それがまた楽しくてひたすら修行に没頭させてくれるのだった。

「もちろん、苦しいときも確かにありましたけどね。最初のころは経行中にもうとっくに切れたと思った父や弟に対する情が出てきましたし、そういう意味で苦しめられました。あとは食事。尊師から定められた規定量をずっと守っていたわけですが、中には貪りのカルマが出ている法友がいてすごいんですよ。それを見ているうちに自分にも渇愛が生じてもう大変でした。今考えれば、そういう人た

ちのデータが他心通で入ってきたんでしょうね。それでもう、彼らに背を向けて隠れるように食事を取るんですよ。今考えれば笑い話ですが、そのときは悪魔の誘惑と闘っているようで本人としては大変だったんですよ。

また、立位礼拝中に無智が出て短い詞章なのにろれつが回らなくなったりもしてしまったんですよ。そしたら今度は嫌悪が出て、隣の男性の大声が気になりはじめて、つい『どうしてそんなに大きな声を出すんですか。もうやめてください』ってやっちゃったんですね。まあ、相手には聞こえなかったみたいですけど、詞章に集中したい、でもできない、というような葛藤が続いて、それで爆発してしまって……。このときも尊師に相談して『君の根本煩悩である嫌悪が出てきてちょうどよかったじゃないか。自分の声と詞章に集中するようにしなさい』とアドバイスをいただいたんですが、あれで心が軽くなりました。この修行中、いつも尊師に助けていただいたような、そんな感じですね。」

◉変化身が抜けた！

ただ、本当の意味で苦しかったのは成就の判定に至るまでの最後の一カ月かもしれない。オウム真理教の四つの秘儀瞑想、立位礼拝、教学と規定の修行を終えたバッダヴァーチャーナンダー正師。しかし、クンダリニー・ヨーガの成就の認定に必要な四つの体験（瞑想中のダルドリー・シッディー、光の没入、変化身、意識の連続）のうち、どうしても明確な変化身の体験が得られず、規定の修行が終わってから再び瞑想修行を繰り返すことになった。

「そうこうしているうちに三月初めに、ロシア救済ツアーのために極厳修行班が一時的に解散になってしまったんですね。で、ツアーの間、経行教学修行班で修行することになったのですが、もうショックでした。だって、あとは変化身の明確な体験さえあればいいと思っていたのに、突然、『修行班は解散になりましたから修行に入る前の部署に戻ってください。いつ復活するかわかりません』ですからね……。

ただ、わたしとしては、そうは言っても今できることをするしかない、という気持ちでしたからね。もしかしたら、あれで心を試されていたのかもしれませんけど……。」

そんな窮地に立たされながらも持ち前の不放逸さでひたすら修行を続けてきた彼女。この直後にその努力が報われるような体験をするから、やはり真理の実践というものは素晴らしいと改めて実感させられる。

「経行教学修行班で修行していたときに面白いヴィジョンを見たんですよ。尊師がわたしのアストラルに現われてイニシエーションを与えてくださるんですよね。それで『あとは変化身だけだから頑張れ!』って励ましてくださって……。

それからしばらくして変化身が抜けて……。この体から抜けて、意識が岐阜の実家まで飛んでいってるんですよ。それですべての体験がそろって尊師に報告したところ、すぐにアンダーグラウンド・サマディに挑戦することになったわけです。」

◉救済者誕生

そして、バッダヴァーチャーナンダー正師はそのアンダーグラウンド・サマディで三時間呼吸停止を記録し、クンダリニー・ヨーガの成就と判定され、文字どおり聖者の仲間入りを果たしたわけである。

「チェンバーを出てからみんなが『すごいね』って言うんですよ。本人は何のことか全くわからずじまいで、あとでよくよく聞いてびっくりしました。昔から神秘体験もなかったし、とにかく平凡そのものの人生を歩んできましたからね。これといった特技もなくていつもつい卑屈になってしまっていたわたしが、いきなり三時間のサマディですから、うれしいやらびっくりするやら……。でも、それでも例えばプライドが出たりとか不思議と心が動かされなかったのは、やはり一つの解脱・悟りに到達していたからでしょうね。」

しかし、そんな彼女が一つだけつい心を動かして喜んでしまったことがある。それはクンダリニー・ヨーガの成就の判定を受け、救済者としての道を歩み始め

たことである。
「出家したときからとにかく尊師のお役に立ちたいと頑張ってきました。尊師には在家のころからいろんなイニシエーションでけがれたわたしを浄化していただいたわけですが、現世のときのわたしはその尊師のエネルギーを無駄に使っていたというか、そういうこともあって出家してからなんとか恩返しをしたいとずっと考えていたわけです。ですから、成就することで自分のエネルギー、といってもそれもすべて尊師からいただいたエネルギーですけど、そのエネルギーを信徒さんに還元できるようになって本当にうれしかったんですよ。やっぱり一出家修行者の立場と成就者では、同じように人に接していてもエネルギーとか影響力は全然違いますからね。それに、これでわたしのような平凡な人間でも成就できるということが証明されたわけだし、後から続く人の励みになりますからね。そういう意味でも尊師の救済活動のお手伝いができて、本当に心底うれしく思っています。」

平凡な人生から聖者へ。一つのヨーガの成就を果たしたバッダヴァーチャーナンダー正師は、今個の完成を目指して新たな道を歩み出した。持ち前の不放逸さで日々の修行に励む彼女から、「平凡なわたしでも個の完成、マハー・ムドラーが成就できました」という声を聞けるのもそう遠くないに違いない。

未来へ

聖者アティッカンタペッティヴィサヤーナンダ化身成就正師

そのとき、わたしの中にこれまで抱いたことのない温かい思いがこみ上げてきた。

——わたしのすべてを供養しよう。わたしは、かつてのわたしのように苦しんでいる人たちのために、わたしの身を捧げよう。そのための解脱であり、そのための修行なのだから——。

わたしは、空気さえ入り込む隙のない、地中に埋められた三メートル四方の小部屋の中で、自分が生まれてきた意味をかみしめていた。幼いころから求め続けてきた本当の生き方を、わたしはやっとここで見つけ出したのである。集中的な修行を始めてから約半年、煩悩と闘い続けたわたしに訪れた寂静の後の大きな意識の変化だった。

わたしは、自分の内側から照射され、チェンバー内を輝かせている光の中で、尊師にこう誓っていた。

——尊師、わたしは、一生弟子として尊師についていきます。そして、全力で

救済活動のお手伝いをしていきますので、どうか、いつまでもよきお導きをお願いいたします——。

わたしは、いつまでもいつまでも心の中でそう繰り返していた。

◉アンチ宗教だったわたしが……

一九八九年夏。わたしはこれまでの人生の中で最悪の精神状態にあった。

わたしは、元来人づきあいが苦手な方で、ある程度の距離を置いて他人と接することで煩わしい人間関係から逃げていたつもりだった。実際、今までは問題なく社会生活を送ることができていた。

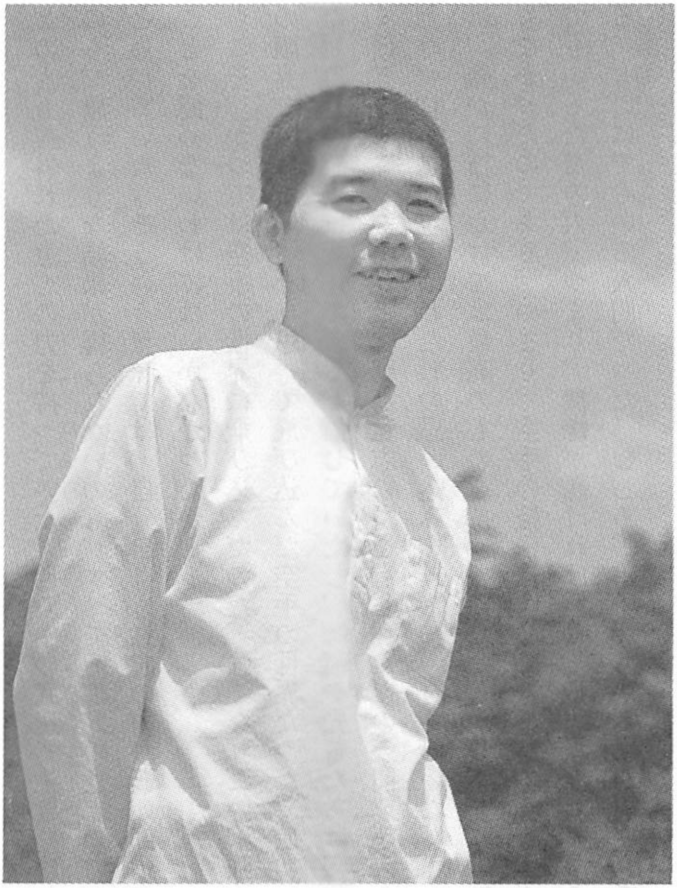
しかし、うわべだけの人づきあいに無理があったのだろうか、それともわたし自身が気づかないところで、人間関係を保っている暗黙の了解事項を侵してしまったのだろうか、いわれのない中傷や罵倒を、いっせいに浴びせられるようになったのである。そのほとんどは、身に覚えのないことであったし、たとえ自分に落

ち度があったとしても、そこまでは言われないだろうと思われるほどの厳しい言葉をぶつけられるのだ。世間を斜めに見てきたわたしにさえ、この状態は耐え難いものだった。

もともと学校や会社勤めには興味がなく、級友たちがテストの点を上げるために必死に勉強したり、同僚が会社での立場を良くするために上司や得意先に取り入ったりしているのを冷めた目で見ていたわたしであった。そのような、ごく一般的な人間のなりわいそのものに全く価値を見いだしていなかったし、人間として生まれた意味はもっと別のところにあると確信していた。

その反面、家族が宗教に傾倒し、Sという宗教団体に入っているのも苦々しく思っていた。彼らを見ていると、信仰という名を借りて、自己の人生を教団——教団という言い方が正しくなければ〝神〟でも〝仏〟でもいいが——に依存させているようにしか思えなかった。

わたしは、すべてを決定するのは意志だと思っていた。大成している人物を見



ると、どの人も並外れた意志の力を持っていた。世の中の底辺で生きなければならないのも、思うような結果が得られないのも、すべてその人の意志の力が弱いからだと思っていた。そういう意味では、自分自身も意志の力が弱い部類の人間であることを認めないわけにはいかなかったが……。

だからこそ、かつては空手の世界に飛び込んだのだ。強くなりたい、強くなって自分の限界を広げたい。そう思って飛び込んだ空手の世界だった。最初は有頂天だった。自分が確実に変化できると信じていたし、師範や先輩たちは、強いだけでなく研ぎ澄まされた感覚と強靭な意志の力を有し、ただの人間を超えた存在だと思えた。しかし、現実はわたしの思い込みを無惨にも打ち砕いた。

師範は、確かに技にかけては最高のものを持っていた。しかし、それ以外の何ものでもなかったのである。つまり、空手の技に長けているという点を除けば、どこにでもいるただの人、つまり、機嫌が悪ければ怒鳴るし、愚痴めいたことも口にする、どこにでもいる人間だった。むしろ、弟子たちからあがめられている

だけに、ただの人よりも傲慢なところが目についた。

空手に失望してからというもの、わたしの生活は荒んでいった。どのように生きたらいいかということがさっぱりわからなかったわたしは、自分を大切にして生きることができなくなっていたのである。そんな状態に追い打ちをかけるように、わたしを取り巻く環境、特に人間関係の悪化が始まったのである。

そんな中で、わたしの興味は宗教に傾いていった。あんなにも否定していた宗教だったが、この苦しみを乗り越えるのには、武術はもちろん、様々な哲学的な書物も役に立たず、人知を超えた視点からの解決策しかないのではないかと思うようになったからである。

わたしは、常々、どうせやるなら最高の環境で自分を磨きたいと考えていた。空手にしても、家からはとても通えないことがわかっていても、当時日本で一番体系が優れていて強いKという団体を選び、かなり無理をして修業をしていたほ

どだ。だから、宗教を選ぶにしても、まがいものだけは絶対に嫌だった。わたしは徹底的に研究した。そうして行き当たったのがオウム真理教だった。
家族を見ていて、一般の宗教団体は一種の社交の場ではないかと感じていたが、オウム真理教にはそういう面がなかった。まず、多くの宗教団体のように、「信じる者は救われる」という御都合主義ではなく、修行がベースとなって自己を改革していくという姿勢が非常に新鮮だった。さらに、わたしがずっと関心を抱き続けてきた仏教、つまり釈迦牟尼の教えを基本とする、非常に整った教義体系があった。そして、何よりも素晴らしいと思ったのは、シャクティーパット（解脱者による直接のエネルギー移入）をはじめとするイニシエーションが存在することだった。
（ここに行けば、自分を変えることができるのではないだろうか。それだけでなく、超能力を身につけることができるかもしれない。）
入信を決めると、わたしは早速オウム真理教金沢支部道場を訪ねる決心をした。

◉本物、だから手応えがある

その人は、おずおずとドアを開けたわたしを、まぶしいほどの笑顔で迎えてくれた。それがジェーンティー師だった。後で気づいたことなのだが、そのときわたしがまぶしいと感じたのは、文字どおりジェーンティー師その人が光を発していたからに違いない。わたしは、無意識のうちにその光を感じ取っていたのだろう。わたしがこう言い切れるのは、クンダリニー・ヨーガの成就者は光を放っているという事実を、わたし自身、自らの体験として数年後に知ったからである。

家に帰ってから、わたしはその日の不思議な出来事を思い起こしていた。入信の申し込み書を書いていたときのことだ。右手に注がれる強烈なエネルギーを感じたかと思うと、次第にしびれ始め、ついにはボールペンを握っていることさえできなくなってしまったのだ。自分の体に支障があってこうなっているのではないことはわかる。おそらく、目の前に座っているジェーンティー師が、わたしの

書いている一文字一文字に集中しているため、彼女から発せられている強力なエネルギーに感応して、右手だけがしびれてしまったに違いない。

〝超能力〟といってもいいだろう。本の中でしか知ることのできなかった神秘の世界が、突然目の前に開けたのだ。

(本物だ——。)

わたしは、オウム真理教を選択した自分の判断が間違いなかったことを確信した。そして、今度こそはこの道を極め、他を導くことができるような立場になりたいと考えていた。

それからのわたしは、毎日のように道場へ通いバクティ(奉仕)に励んだ。功徳がなければ修行が進まないということを聞いていたせいもあったが、何よりも、バクティそのものがわたしの性に合っていたからだ。そして、寝食を忘れるほどバクティに熱中した後は、必ず神秘的な体験をすることができた。

——ある日。アストラル音楽を聴きながら瞑想をしているときだった。いつの間にか、わたしは深い意識状態に入っていた。眼前に町並みが見えている。一度も見たことのない町だ。かといって、日本のどこにでもあるような風景。わたしは、意識のボールとなって空中に浮いていた。突然、視界が動き始めた。わたしは、ものすごいスピードで家々の間を飛び始めたのだ。まるで、高速道路を猛スピードで走っているときのように、景色が迫ってきてはあっという間に後方へ去っていく。その快適さ、解放感は、これまで感じたことがないものだった。わたしは、そのヴィジョンを眺めながら、

（ここにいながらにして世界旅行をすることも夢ではないな。）

などとのんきなことを考えていた。

このように、わたしの場合は瞑想中に様々なヴィジョンを見るという体験が多かった。それも、バクティをやればやるほど手応えは確かなものになっていった

のである。わたしの神秘世界への興味は次第に膨らんでいった。

しかし、ヴィジョンの世界（下位アストラル世界）に入りやすいということは、言い方を換えるならば低級霊域に入りやすい、つまり、魔境になりやすいということでもあった。だが、そのときはまだ、魔境に入ることの恐ろしさを本当の意味で知らなかった。わたしが、魔境の恐怖を身に染みて感じるようになったのは、これからずっと後のことであった。

◉出家へのあこがれ

ジェーンティー師やサマナ（出家修行者）の方々を見ていて、わたしの中に出家へのあこがれが芽生えた。煩わしい世間のしがらみがいっさいない出家生活。自己を磨き上げるための修行に一生を費やす出家生活。わたしがずっと求め続けていた生き方こそ、出家生活そのものだったのである。

しかし、いざ自分が出家するとなると、大きな問題が目の前に立ちはだかった。

空手の世界に失望しオウム真理教に巡り合うまでの長い間、わたしは、半ば自暴自棄になり、かなり堕落した生活を送っていた。十年もの間、煩悩を満足させるために生きていたといっても過言ではないかもしれない。中でも、性欲に関してはかなり深みにはまっていた。したがって、禁欲的な出家生活を送ることに全く自信が持てなかったのである。

（適当に遊びながら、在家でやっていくしかないな。）

わたしは、そう決めていた。

しかし、修行とは偉大なものだ。修行によって煩悩を昇華することは、在家であっても可能だったのである。

深夜セミナーに出席してグルヨーガの瞑想をしていたときのことである。マントラを唱えてしばらく経ったとき、ヴィジョンの中にマントラが文字となって浮かび上がった。その文字となったマントラがわたしに迫り、わたしの体を包んだ。

そのプロセスは、わたしがマントラを唱える度に起こり、ついには唱えたマントラの文字にすっぽりと包み込まれてしまった。

（ああ、すごい。音が視覚的に見える……。）

わたしは、マントラを唱えながらその不思議なヴィジョンに集中し続けた。すると、いつしか光の粒がキラキラと輝きながら、まるで粉雪のように天から降り始めた。降り注ぐ光の粉は頭頂を、そして体全体を包んでいく。それと同時に、わたしはえもいわれぬ至福感に浸されていった。

目の前にはコバルトブルーの世界が広がっていた。それが黄色に変わったとき、わたしの体は振動し、ついに宙に浮き上がった。ダルドリー・シッディだ。クンダリニーが下位のチァクラに引っかかって起こる初歩的なダルドリーだったが、確実にわたしの身体は重力の束縛から解放されて宙に浮かんでいたのである。

わたしは、わたしと一緒に修行している友人や、インストラクターのサマナの方に見られていることも忘れて泣いていた。感動が恥も外聞も忘れさせていた。

わたしの中に大きな変化があったのはこのときからだった。それ以降、全く性欲がわかなくなったのである。

（おかしいな。）

あまりの変化に、自分自身半信半疑だった。試しに、ビデオを借りて見てみることにした。しかし、全く面白くない。要するに、性的なものに全く興味がわかないのである。一カ月経っても、二カ月経っても、三カ月経っても、その状態は変わらなかった。

わたしは、わたしが出家するための唯一の障害を克服することができたことを知った。もう迷いはなかった。入信してわずか四カ月後の十二月十五日、わたしは一度も尊師にお会いしないまま、オウムバッシングの嵐の吹き荒ぶ中、尊師の直弟子になるために富士山総本部道場へ向かった。

尊師に初めてお会いしたのは、わたしたちサマナに説法をしてくださったときである。尊師は、ゆったりとした足どりで道場へ入って来られた。なんと威厳の

ある方だろう。なんと大きな方だろう――。一目見て、わたしは尊師の他を圧する堂々たる姿に驚嘆した。それでいながら、尊師から発されるヴァイブレーションは慈愛に満ち、包み込むような温かさを持っている。わたしは思わず合掌していた。そして、この方の弟子になれて本当によかったと、出家できた自分の功徳に感謝していた。

◉飛躍的に向上する霊的ステージ

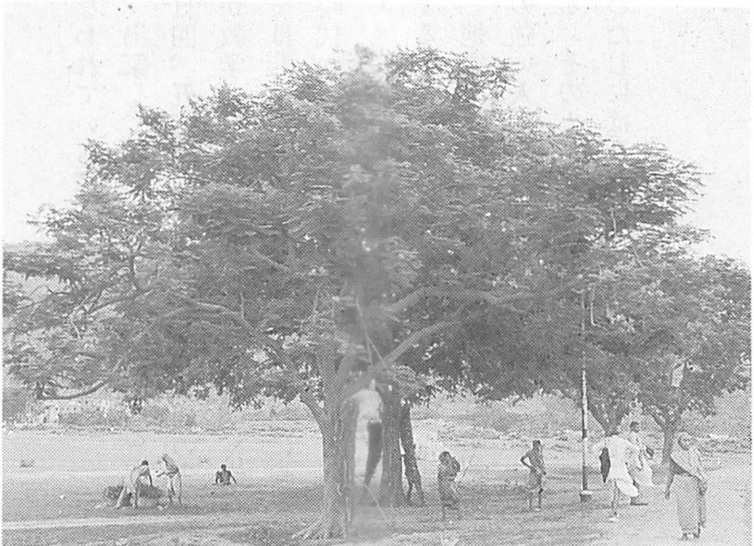
オウム真理教の出家修行者は集中的な修行をしている期間以外は、各々の適性や克服しなければならない課題に応じてワークと呼ばれる奉仕活動を行なっている。目につくところでは、全国の本部・支部道場で信徒さんの教化や一般の方への布教活動などがサマナの手で行なわれているが、その他にも様々なセクションがあり、多くのサマナがワークを通じて自己の智慧を磨き、集中力を養い、功徳を積んでいるのである。

わたしが配属されたのは、富士山総本部道場の生活班だった。生活班とは、家庭でいえば主婦のような役目であり、大勢の修行者の食事の用意、道場内の掃除、供物の買い出しなどが主な仕事である。わたしは、尊師がいらっしゃる総本部でワークができることがうれしくてならなかった。また、人と接するのが苦手なわたしにとって、ワークをする上で人と話す必要がない部署だったこともありがたかった。それだけに、ワークに集中することができた。そして、尊師のおっしゃるとおり、ワークをするだけで霊的なステージは確実に向上していった。あるときなどは、集中的に道場内の拭き掃除をした直後、少し瞑想しただけで本物のダルドリー・シッディ、つまり、アナハタ・チァクラのステージでのダルドリー・シッディが起こったこともある。

(なるほど、道場にいるだけでイニシエーションになるんだな。)

わたしは、他の場所とは全く違った道場のヴァイブレーションに今さらながら驚いた。そして、道場のホーリーなヴァイブレーションは確かにわたしたちサマナ

を守ってくれていたのである。
それがわかったのは道場内のワークから、供物の買い出しなどの外へ出るワークへと移ったころからである。それまでは、ワークをしていない時間はすべて教学か修行へ当てていたのだが、供物を買いに市場へ行った帰りなど、車の中で二、三時間眠ってサボるようになっていった。眠りも一種の煩悩だから、次第に煩悩を肯定するようになっていったということがいえるだろう。このように下降した精神状態に陥っても、ザンキの念を持ち向上しようと努力できれば救われるのだが、そのときのわたしは煩悩の誘惑に負けてしまい、ついには暗性食に手を出すようにまでなってしまった。修行にも教学にも気持ちが向かわなくなってしまったのはいうまでもない。
ほんの少し道場から離れただけで、わたしのそれまでの安定した状態は崩れてしまった。直接お会いする機会はなかったが、尊師はそんな堕落した状態のわたしをご存じだったに違いない。わたしは、しばらくすると生活班を外され、山梨



県の清流精舎で行なわれている修行班に移された。

ここでの修行は、出家して間もないサマナの研修という意味合いが強いものだったが、それでも一日四、五時間の睡眠時間と一時間の食事時間を除いて、あとの時間はすべて修行か教学という厳しいプログラムで、修行が全くできなくなっていたわたしにとっては非常に苦痛だった。その苦痛に輪をかけたのが、蓮華座の痛みだった。信徒時代から蓮華座は苦手で、三十分と組んでいられなかったが、サマナとなってからもこの状態は変わることはなかった。

カルマの理論によると、痛み、特に下半身の痛みは、地獄のカルマの表われであるとされている。地獄のカルマのない人は、蓮華座を組んでも痛むことはないが、地獄のカルマの強い人は、それこそ一分も組んでいることはできないほどの激痛にさいなまれる。そのカルマを落とすには、激痛に耐え、蓮華座を組み続ければいいのだが、わたしにはそれができなかった。

◉極限のワークへ

修行はできない、教学もできない、それでいながら魔境に入る。そんな状態から抜け出たいと、わたしは、そのころ始まったばかりの阿蘇のシャンバラ精舎建設のワークを自ら志願した。少しでも功徳を積めば、少なくとも魔境からは脱出できる。そんな気持ちもあったことは確かだが、それよりは、思いっきりワークをしてみたいという気持ちの方が強かった。

熊本県阿蘇――。世界一のカルデラを擁する阿蘇山の麓に、シャンバラ精舎の建設予定地はあった。わたしたちの作業は、起伏の大きい原野の整地から始めねばならなかった。電気も水道も、もちろん眠るための建物もない未開の土地で、山を切り崩し谷を埋めていく。それは、筆舌に尽くせない困難な作業だった。わたしが阿蘇に入った六月は、ちょうど梅雨の真っ最中で、毎日のように雨が降っていた。それでなくても不安定な足元が泥の海と化し、工事は難航した。高原だけあって、日が落ちるころから気温が急激に下がり、夜中には真冬のように寒く

なってしまう。わたしたちは、バスの中で身を寄せ合うようにして眠りについた。
やっと整地にめどがついたころ、今度は道場の建設である。このころになると梅雨はあけていたが、新たに昼間の猛暑がわたしたちを襲った。南国の湿気をはらんだ空気が日の出とともに温度を上げ、日中には四十度近くまでなる。地形のせいだろうか。風もあまり吹かないので、うだるような空気がよどみ、暑さをいっそう強く感じさせる。わたしたちはその中で黙々と道場を建てていった。
まず、食事をし眠るための生活棟の建設である。それと平行して、修行棟、研究棟等、いくつかの建物を建てていく。広大な敷地の中に、計十二棟もの建物を建てていかなくてはならない。いつ終わるともわからない、気の遠くなるような作業だった。
体を動かすことが好きなわたしでさえ、音を上げてしまいそうな過酷なワークだった。しかし、わたしはこの厳しいワークを通して、自己のカルマが落ちていくのを実感した。阿蘇に来る前にあれほどわたしを苦しめていた味覚に対すると

られが、数カ月経つころには綺麗になくなっていたのである。

そして、わたしがこれまで積極的に修行できなかった理由もわかった。出家当時から、なぜか解脱に対する願望がなかったが、そういう状態で出家生活を続けていると、自分が何のために出家したのかわからなくなってくる。これまでのわたしは、解脱願望がないがために修行の意味がわからず、よって修行をしようともしなかったのだということにやっと気づいたのである。だが、解脱願望を持てといわれても、急に心をチェンジさせることはできない。わたしは、まず尊師を意識することから始めてみようと思った。

そのころのわたしのワークは、資材の買い出しのための四トンダンプの運転が中心となっていた。わたしはまず、帰依ということから始めてみようと、運転している間中、尊師を観想しながら説法テープを聴き続けた。するとどうだろう。心は安定し、それでいて歓喜するという、非常に心地良い状態が訪れたのである。

(ああ、今まで、ワークはワーク、説法は説法と切り離して考えていたけれど、

実は、ワークも教学も、尊師に心を合わせていくための大切な修行なんだ。）
わたしは、尊師が日ごろからおっしゃっている「ワークは最も大切な修行である」「教学は修行の土台である」という言葉の意味がやっとわかったのだ。
尊師の意思されているワークをすることはやりがいがある。尊師の説法を聴くのは楽しい。ただ、尊師が阿蘇にいらっしゃらないのが寂しい――。わたしの意識は、かたときも尊師から離れることがなくなっていた。
そんなとき、尊師から意思されて阿蘇から呼び戻されることになった。よく、尊師は弟子の数だけの目を持っていて、常に一人一人の弟子を見守っておられるということを先輩のサマナから聞かされていたが、このときほどそのことを強く感じさせられたことはなかった。富士と遠く離れた阿蘇にいる大勢の弟子の中の一人にすぎないわたしの心の変化を読み取り、もう大丈夫と思われたのだろう。わたしは、尊師のそばへ戻れることがうれしくてならなかった。わたしは、阿蘇の現場を後にした。阿蘇の山が雪化粧を始めた一九九〇年十二月のことであった。

◉魔境の真っ直中で

信徒時代から、度々魔境に入っていたわたしだった。魔境は霊的ステージだけが進み、心の成熟、功徳がそれに追いついていかない場合に入りやすくなる。つまり、霊性だけは高いから異次元（アストラル）の世界へ入ることはできるようになるのだが、精神的ステージが低いために高い世界の体験をすることができないばかりでなく、低い世界と結びついてしまうのである。その結果、瞑想中のヴィジョンや夢見が悪くなることから始まり、アストラル世界の投影である現象界で修行の妨げとなる現象が起こるようになったり、精神的に非常に不安定になったりする。

魔境から抜け出るためには功徳を積むこと、心をグルに合わせることが不可欠なのだが、阿蘇から帰ってきて半年あまり経過した一九九一年の秋ごろから、わたしは再び尊師に帰依できない状態になってしまった。

誤解のないようにここで少し説明をしなければならないと思うが、自己を磨き上げるための修行は、本来の自分、つまり真我に到達することを目的としている。そして、わたしたちの意識は、この真我の上に超潜在意識、さらにその上から潜在意識、表層意識という幾重もの衣をまとった形で存在している。修行は、この表層意識、潜在意識、超潜在意識という汚れを順次取り払っていく作業に他ならない。したがって、表層意識レベルの汚れを取り払った後は、わたしたちが乗り越えなければならない潜在意識、超潜在意識という壁に突き当たることになる。

また、わたしたちの意識をけがしている煩悩は、大きく分けると貪(とん)・瞋(じん)・癡(ち)の三つになるわけだが、それは最も根本的な煩悩であり、表層意識・潜在意識レベルの煩悩はその人の経験の数だけあるといっても過言ではない。したがって、一つの煩悩を乗り越えたとしても、わたしたちが止滅しなければならない煩悩は無数にあるといえるのである。

修行者は、この無数にあり、さらに多重構造になっている煩悩と闘い、それを

落としていかねばならない。そのためには、まず、自分の煩悩を証智する、つまり、はっきりと理解する必要があるのである。よって、修行を始めると、今まで気づかなかった煩悩に直面し、非常に心が不安定になることがある。これも魔境の一種といえるが、これも教学をして法を根づかせ、功徳を積むことで乗り越えることができるのである。

さて、わたしがこのとき入った魔境は、前述のとおり霊性と精神性のアンバランスが引き起こしたものだが、一面、修行が進んであらわになった潜在意識によるものだということもできた。

とにかく、尊師を意識することができなくなっていた。心の中で、こうしたい、あれが欲しいといったエゴが尊師を追いやっていたのである。

そんなとき、わたしは非常に示唆的なヴィジョンを見た。

――わたしは、駅へ続く道を歩いていた。とにかく列車に乗らなければならないということだけを考えていた。間もなく駅だというそのとき、突然、足元に深

い穴が大きな口を開けた。穴は途中から漆黒の闇となって、地の底まで続いているように見えた。わたしが、「ああ、これは地獄へ行く穴だな」と、妙に覚めた目でその暗闇を見つめていると、突然、穴の縁が崩れ始めた。穴は次第に大きくなっていく。ついにわたしの足元までその穴は広がった。「呑み込まれる！」そう思ったとたん、わたしは瞑想から覚めた——。

嫌なヴィジョンだったが、これが今のわたしの状態を表わしていることはすぐにわかった。すなわち、自分から尊師を否定して、尊師から意識を外しただけで、地獄の兆候が出てしまったということである。

（ひどい状態だな。真剣に真理の実践をしないとひどい目に遭うぞ。生半可な気持ちではやっていけないんだ。）

そう思いながらも、下降する意識を自ら引き上げることはできなかった。ただ、心の中でザンゲするのが精いっぱいだったのである。

そうこうしているうちに、現象的にも悪いことが起こるようになってきた。そ

れら一連の出来事の中でも、最もわたしを討ちのめしたのは、二度にわたるバイクの事故だった。事故そのものは大したものではなかったが、魔境のときは悪いことが重なるもので、二度とも相手が執ように慰謝料を請求してきたお蔭で、尊師に多大なご迷惑をおかけすることになってしまった。

（これでは、徳を積んで魔境を抜け出すどころではない。逆に、魔境の深みにはまってしまう。）

わたしは、肉体的にも精神的にも疲労の極みにあった。そして、いまだに解脱したいという強い欲求も持てない状態にあった。

◉極厳修行へ

ちょうどそのころ、クンダリニー・ヨーガの成就のための極限修行が近々行なわれるという知らせがあった。選ばれるメンバーは四十名。サマナに義務づけられている教学を終え六百時間の立位礼拝の修行を完成しているか、もしくは、そ

れらの加行はまだ終えていないが、極限のワークをしているということがそのメンバーに選ばれる条件だった。さらに、修行に入りたい者は決意文を提出するようにということだったが、そんなことはわたしには遠い世界のことだった。

わたしは、教学も立位礼拝を終えていなかった。ワークについては寝る間も惜しんで積極的にしていたが、その背景に尊師に心から帰依できていないという後ろめたさがつきまとい、自分から極限のワークをしていたとはとても言えなかった。

(ワークをしながら、一年くらいかけて立位礼拝を終えよう。それだけ立位礼拝をしたらカルマも落ちるだろうし、帰依もできるだろう。そして、一年後には自分から極厳修行に入れてくださいと言えるようになろう。)

わたしは、尊師にこれだけの迷惑をかけていながら、とても自分から決意文を提出することはできなかった。

決意文を提出しないままに数日が過ぎた。もうそろそろ極厳修行が始まるだろうと思っていたころ、突然、尊師から電話がかかってきた。
「どうだ。そろそろ修行に入るか？」
思いがけない尊師の言葉に、初めはその意味がわからなかった。
「ワークの方は、引き継ぎのサマナを送るから、今すぐ修行に入りなさい。」
わたしは、自分の耳を疑った。尊師はわたしに修行に入れとおっしゃっているのだ。うれしかった。魔境に苦しみながらも黙々とワークをしてきたことを、尊師は認めてくださったのだ。そう思うと、今までの屈託が晴れて、心が急に軽くなった。

一九九一年十二月十二日、極厳修行が始まった。
極厳修行のプログラムは、文字どおりこれまで経験したどの修行よりも厳しいものだった。一日六時間の特殊な呼吸法、四時間の経行修行、十時間の生起の瞑

想、三時間の究竟の瞑想という、睡眠時間が全くないハードな修行を延々と繰り返すのである。その過程で、わたしたちがなさなければならないことは、現世捨断、集中、不放逸。そして、達成しなければならないことは、空中浮揚、光への没入、化身の体験、意識の連続性の四つであった。この四つをクリアすることが、クンダリニー・ヨーガ成就の最低条件なのである。

◉煩悩との闘い

現世捨断とは、食べること、飲むこと、眠ることという根本的な煩悩を捨断するということである。これらは、人間が生きていく上では不可欠なものとされているが、実際には修行によって食事も水分も睡眠も不要な身体をつくり上げることができるのである。現に、わたしが修行に入る前に、聖者マイトレーヤ智徳成就者（オウム真理教の出家修行者、マハー・ムドラーの成就者）、聖者ヤソーダラー最上善逝（同じく、大乗のヨーガの成就者）が、立て続けに空気の遮断され



た地中で、五日間、飲まず食わずのサマディを成し遂げている（その後、わたしの修行中に計九名の連続アンダーグラウンド・サマディが行なわれ、すべて成功のうちに終了した）。

ところで、わたしがこれまでのサマナ生活で最も引っかかってきた煩悩、それが食欲であった。そして、この極厳修行でも、わたしは食の煩悩に翻弄されなければならなかったのである。

修行が開始された当初は、深い意識に到達していなかったせいだろう、二日に一度、それもごく少量の食事で十分だった。しかし、修行が進み、次第に潜在意識があらわになり始めたのに伴って、二日に一度が毎日になり、食事の量も徐々に増えていった。わたしの食の煩悩との長い長い闘いはこうして始まったのである。

食事の量が増えるとエネルギーが濁り、エゴが出やすい状態になる。わたしの場合は、否定的な想念と闘争心が強烈に噴出しだした。特に、闘争心は尊師に対

するライバル意識となって、またも尊師に帰依できない状態を形成していったのである。尊師の言うことを聞きたくないというエゴを抑えられない自分と、エゴを抑えようとしている自分。この相反する思いはどうすることもできなかった。それは、霊的な体験が豊富だったということと相まって、与えられた瞑想課題さえこなしていけば成就はできるという、非常に傲慢な思いにつながっていった。

◉神秘体験に助けられて

食の煩悩とエゴに翻弄されながら、その反面、霊的なステージは確実に上がっていった。わたしが修行を続けていられたのも、この豊富な体験に負うところが多いのではないかと思う。なぜなら、それらの体験は非常に示唆的なものが多かったからである。

あるときは、瞑想中に白銀の円柱がイメージとして現われた。と、煩悩が泥となって、その円柱にベッタリと付着した。わたしは、それを丁寧に拭き取った。

すると、またすぐ煩悩の泥で汚れる。慌てて拭き取る……。それを繰り返しているうちに、「汚れても拭き取ればそれでいいじゃないか、中味が汚れるわけじゃなし」と思うようになってきた。すると、心がすごく楽になった。

この体験は本当に貴重なものだった。煩悩は、真我に付着した汚れにすぎないのだから、必ずいつかは煩悩から真我を引き離すことができるという確信が芽生えたからである。しかし、今生だけでなく、気の遠くなるほど何生も前から修習してきた煩悩である。そうたやすく止滅できるわけはなかった。

修行もひと月ほど経過したところ、それまで頻繁に道場へ来られてわたしたちの状態をチェックしてくださっていた尊師が、全くお見えにならなくなってしまった。心から尊師に帰依できていなかったにもかかわらず、いざ尊師にお会いできないとなると、不満でもあり寂しくもあった。修行にも身が入らない。機械的にプログラムをこなしているような味気ない気持ちだった。

そんなある日、わたしは変化身で尊師のお姿を探しているヴィジョンを見た。道場の外へ出て、あちこちをうろつき、尊師を探しているのである。かつては、闘争心から尊師に失礼な態度をとってしまったこともあったが、このとき、尊師の存在がわたしにとっていかに大きなものであるかがひしひしと胸に迫ってきた。そして、尊師が来られないのが寂しいと思うのも煩悩であって、尊師がいらっしゃらなくても修行するのが帰依であるということにやっと気づいたのである。

それからは修行が楽しくなった。そして、自分のけがれを落とすために極厳修行という最高の場を与えてくださっている尊師に心から感謝できるようになった。

神秘体験は相変わらず豊富だった。以前はぼんやりと明るい程度の光が、このころになると、どんどん強まり、太陽ほどのまぶしさになっていた。変化身の体験も、それほど高い世界ではないが、かなり頻繁に起こっている。そのころの日記には、日々訪れる体験の記述が多い。

◆二月七日

究竟中、宇宙空間に出た。そこにはでかい顔に手足がついた生き物が浮いていた。目をギョロギョロさせたり舌を出したりしている。もう一匹というか、もう一体いる。これは尻に手足だけがついたもので、情けない姿だと思った。

久しぶりにヴィジョンの中にもう一人の自分が登場し、そのヴィジョンを観察しているもう一人の自分がいるという、意識の分化を経験した。

立位礼拝中、頭頂に集中すると、光がまぶしくなり、白い光に視界を遮られそうになった。グルに自分の汚れたエネルギーを供養すると、オレンジの薄明かりに包まれた。気持ちが良かった。

◆二月十一日

かなり明るい。白い光源、白い太陽、オレンジの太陽などが見える。喜覚支をしていると、綺麗なクラシック音楽（ワルツ）が聞こえる。しばらくして童謡が

聞こえたと思ったら、左斜め上に光源が現われ、強い白光が広がる。

◆二月十四日

異星人が現われ、三昧の入り方を教えてくれると言ってくる。しばらく待っていたが、体が弱っているらしく、時間がかかりそうだったからヴィジョンを切った。丸坊主で頭がでかく耳が大きい、よくある宇宙人の顔だった。

◉煩悩は苦だ!

与えられた瞑想プログラムがそろそろ終わるという、二月も半ばを過ぎたころ、尊師がロシアへ行かれるという話が伝わってきた。わたしはすでに四つの体験をすませていたし、尊師がいらっしゃらなければ修行もしづらくなるのではという不安感もあって、尊師が出発される前に成就の認定をもらおうと、瞑想が根づく根づかないはさておいて、早くプログラムを終了させようと必死になった。だが、

成就のために捨断しなければならない貪りの煩悩は収まるどころかますます強くなっており、その状態から逃げ出したいがために成就の認定を受け、修行を終えたいと思ったというのが正直な気持ちだった。そのころのわたしには、クンダリニー・ヨーガの成就イコール、救済者として生まれ変わるという、当たり前のことが理解できていなかったのである。

そんな状態だったから、プログラムを終了しても成就の認定は下りなかったのは当たり前だった。尊師からの指示は、ツァンダリーの瞑想をあと二千回するようにというものだった。

それから数日後の三月三日をもって、極厳修行班は一時的に解散となった。尊師がロシアへ行かれている間、もとの部署に戻ってワークをするようにという指示に従って、わたしはワークへ戻った。希望すれば一時的に教学修行班に入ることは可能だったが、食の煩悩がわたしをそうさせなかったのである。

修行を出るとき、次のメンバーにはわたしの名前が入っているから、そのつも

りでいるようにという尊師からのお言葉をいただいていた。しかし、わたしは煩悩に負けた。いや、煩悩に負けたといえるのは、少なくともそれと闘った場合である。わたしは、煩悩に〝負けた〟のではなく、煩悩を〝楽しんだ〟のだった。

修行を出たとたん、案の定、食に飛びついていた。ただただ食べていた。たった五日で十キロも太ったといえば、どれだけ貪ったかは想像していただけるのではないだろうか。気づいたときは、足は二倍ほどにも腫れ上がり、顔もパンパンにむくんでいた。とても次の修行に入れるような状態ではない。

それだけ貪ったにもかかわらず、わたしの中には空しさしかなかった。貪っても貪っても、心は空しくなるばかりであった。貪りは結局は苦しみでしかないんだ――。そのときになって、初めてわたしは煩悩は苦しみであるということが納得できた。今までは煩悩を満足させられないことが苦しみだった。煩悩を満たしたいと渇愛していた。しかし今は違う、煩悩に振り回されることが苦しみにつながるということが、心の底から理解できたのである。

◉崩れ落ちる煩悩

尊師がロシアから戻られてからしばらく経って、極厳修行が再開されるという知らせが届いた。わたしは、修行を出てからの自分の状態を省みて、とてもメンバーに選ばれるとは思っていなかった。また一から始めよう——。わたしは、自嘲気味にそう決意していたのである。

ところが、尊師はそんなわたしでも修行に入れてくださったのである。わたしは、尊師の顔をまともに見ることはできなかった。

三月十九日。修行が再開された。もう後戻りはできなかった。

修行は、いったん下降したエネルギーを上昇させることから始まった。初めはスヴァディスターナ・チャクラで引っかかり、味覚に対する執着が出てきた。その状態を抜けると、今度はマニプーラ・チャクラの引っかかり、つまり、知識に対する渇愛が出てきた。本を読みたい。研究したい。データが欲しい……。しか

し、それもエネルギーの上昇に伴って消えていった。それと入れ替わるように、今度はアナハタ・チァクラの引っかかりである情・プライドが、それが過ぎるとヴィシュッダ・チァクラの引っかかりである地位・名誉に対するこだわりが生起し、それを抜けるとアージュニァー・チァクラの現世的願望がわたしを苦しめるようになった。

まさに経典どおりに、下位のチァクラから上位のチァクラへとエネルギーが移行していくに従って煩悩も変化していった。そして、最後に残った煩悩は、やはり食欲だった。

いつもこの煩悩で苦しんできた。この煩悩で何度立ち止まらなければならなかったんだろう。わたしには、もう強行手段しか残っていなかった。

(そうだ、七日間の断水断食をしよう。もし、この修行を達成できなかったら、教学修行班に入れてもらい、基礎からやり直そう。)

わたしはそう決意した。修行が再開されてほぼひと月ほど経過したときだった。

そう決意したちょうどそのとき、尊師が道場へいらっしゃり、一人一人の状態をチェックされた。わたしは、自分の決意を申し上げた。すると、尊師はにっこりと微笑まれ、

「気絶するまで詞章を唱えなさい。」

と、うれしそうにおっしゃった。わたしは、尊師が喜んでくださったのがうれしかった。そして、この方法で間違いがないことを知った。

ところが、断水断食を始めてみると、観念が大きな障害となって立ちはだかった。二日目には、水も食事も取っていないんだから、経行の修行は絶対無理だと思うようになった。しかし、実際に経行を始めると、苦しいのは最初の十分ぐらいで、その後は全く平気だった。三日目もそんなことの繰り返しだった。四日目、五日目は、思ったほど苦しくなかった。しかし、心のどこかでは食を求めているのがわかった。そして六日目、喉が乾いて水分への渇愛が激しくなってきた。その乾きに耐えることができず、意図的に意識を飛ばして眠りの中へ逃避してしま

う。尊師の「気絶するまで詞章を唱えなさい」というご指示もどこかへ飛んでしまう。本当に情けなかった。

七日目。最後の一日である。先日の情けなさを思い出していたら、突然、「自分は修行者である。解脱をするために出家し、尊師の弟子になったのだ。だとしたら、こんなことにとらわれていてはいけない」という思いがわいてきた。すると、さっきまでわたしをしばっていた食の煩悩がバラバラと崩れ落ちていった。一瞬だった。そのときを境にして、わたしは食欲の呪縛から解放されたのである。

◉鎮まりゆく心

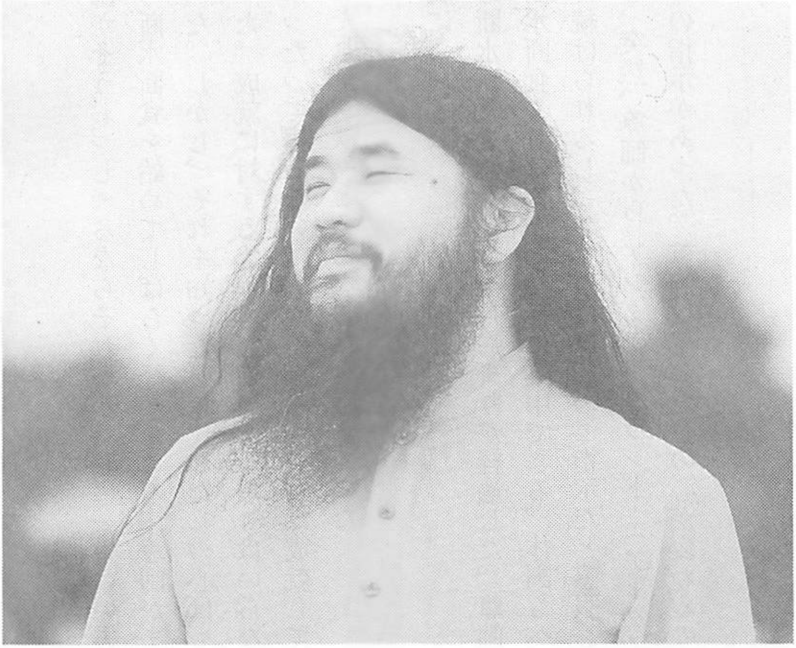
それから四日間水分のみを取り、続けて三日間ごく少量の食事をした後、わたしは再び断水断食の修行をしてみようと思い立った。前回は、途中で眠りに逃避してしまったこともあり、今度は断水断食プラス不眠に挑戦したくなったのである。

わたしは、尊師に眠ってしまったことのザンゲと、月の半月以上は断水断食できるような修行者になりたいので、ぜひやらせてくださいという決意を提出した。ところが、わたしの意気込みとは裏腹に、尊師のご指示は「二日に一回の断水断食を繰り返すように」ということだった。

（自分は、煩悩に弱いのか……。）

わたしは気落ちしてしまった。なぜなら、道場には「断水断食ができない者は、二日に一回の断水断食にするように」と掲げてあったからである。長期の断水断食をすることによって修行ができなくなったり、逆に煩悩が強くなってしまったりすることを避けるための注意書きであった。尊師のご指示をこれに照らしてみると、結局わたしは煩悩に弱いということになってしまうのである。

以前のわたしだったら、そこで闘争心を出して、尊師のご指示を無視したかもしれない。しかし、今はもう自分のエゴはたくさんだと思った。これまでも、自己のエゴによって苦しんできたわたしだった。もう尊師のご指示に従うしかない



と思った。尊師がそうおっしゃるならそれがわたしに一番いい方法なのだと……。

二日に一回の断水断食を始めてしばらく経ったころ、尊師がまたロシアへ行かれることになった。しかし、それを知ったとき、わたしの心はもう前のように動くことはなかった。成就に対する焦りもなかった。焦りはいらないと思った。今年いっぱいかかったって構わない。心が変わらなければ成就しても意味がないのだから。――わたしは、淡々とそんなことを考えていた。

◉〝救済〟を胸に

二日に一回の断水断食をしながら半月あまりが経過した。尊師のおっしゃるとおり、完全な断水断食よりはるかに修行に集中できる。体調もベストだ。これなら、半永久的に続けられるし、さすがは尊師のご指示だと感服しながら、修行に集中していると、突然、尊師から〝アンダーグラウンド・エアータイト・サマディ〟に入るようにとの指示があった。尊師は、わたしの心が変わるのを待っておられ

たのだな——。そう思った。それと同時に、この最後の修行に対する意欲が出てきた。

チェンバーの中で、わたしは、これまでわたしにまとわりついていた食の煩悩について考えていた。

現世にいたころ、わたしは、普通の人だったら逃げ出すような苦しみでも意外と耐えることができた。しかし、そのストレスは、例えばおいしいものを食べることなどによって発散させ、結局は苦しみに打ち勝ってはいなかったのだ。つまり、見返りがあるから苦しいことにも我慢ができたのである。そして、今回の修行でも、苦しみのはけ口として食を求めてきたのではないだろうか。

だとしたら、食の煩悩が切れた今、自分は苦しみに耐えるだけの見返り、つまり楽しみを持っていないことになる。では、解脱してしまったら、いったい自分に何の楽しみがあるのだろう？　そこまで考えたとき、わたしの脳裏に、突然、

〝救済〟という言葉が浮かんだ。

そうだ。救済があるじゃないか。わたしが自己の煩悩を止滅し、絶対の平安を得たなら、それを多くの人に広め、そこへ導くという楽しみが――。修行中、食の煩悩が溶けていったときのあのすがすがしさを、そして、自己のエゴから離れたときの解放感をすべての人に知ってもらえるなら、そのためにわたしのこれまでの経験が役立つなら、それに勝る喜びはない。

わたしは、そのために身を供養しよう。一生をかけてこの身がボロボロになるまで供養し続けよう。そのために、わたしは修行をし続けなければならない。そのために、わたしは少しでも高いステージへと到達しなければならない――。

わたしの中で、初めて修行と救済が結びついた瞬間だった。何のために修行をするのか。なぜ解脱をしなければならないのか。それは自己が苦しみから脱却するためだけではなかったのである。自己の経験を多くの人に伝えるためにこそ、修行があり、解脱があるのだ。

わたしは、内側からわいてくる温かな思いにしばらくの間浸っていた……。

チェンバーを出て十日目、わたしはクンダリニー・ヨーガの成就者として認められ、尊師より「アティッカンタペッティヴィサヤーナンダ」というホーリー・ネームをいただいた。何度も横道にそれ、尊師を見失いかけながらやっとついてきた弟子に、尊師はなんと素晴らしい名前を授けてくださったのだろう。信徒時代から何度も魔境に突っ込み、最後まで餓鬼（低級霊域）のカルマに苦しめられたわたしにとって、パーリ語で「低級霊域を超越した快楽」という意味の、これ以上にない名前であった。

わたしのように情けない弟子を根気強く、そして大きな慈愛をもって導いてくださった尊師のお役に立てるよう、〝救済〟を胸にこれからの人生を送りたい。そして、できることなら、尊師より先にこの世を去らせていただきたい。それが今のわたしの願いである。

ズバリ！ 真理のメッセージ

麻原彰晃尊師のラジオ番組

AM720kHz

ΕΥΑΓΓΕΛΙΟΝ ΤΗΣ

エウアンゲリオン・テス・バシレイアス

ΒΑΣΙΛΕΙΑΣ

夜11時放送！

※短波(17.710MHz)でも夜10時から
放送しています。



あなたに絶対の幸福を約束する

――オウム真理教

心身の悩みを解決したい
超健康体を得たい
豊かな生活を送りたい
素晴らしい人間関係を築きたい
スーパー・パワーを身につけたい
来世も幸福に生きたい
解脱し、永遠の至福を得たい

最高の教義、最高の奥儀、そして麻原尊師のもと、すべては確実に実現します。

●オウム真理教が誇る三つの基本的修行体系

1、マハーヤーナ

現実生活をより豊かにし、幸福な人生をお約束します。ご年輩の方、仕事が忙しく時間のあまり取れない方にお勧めです。

2、タントラ・ヴァジラヤーナ

行法、イニシエーションを中心として進め、霊性を向上させて、神秘世界を実体験することができます。この修行体系を選択すれば今生で解脱し、悟ることも夢ではありません。

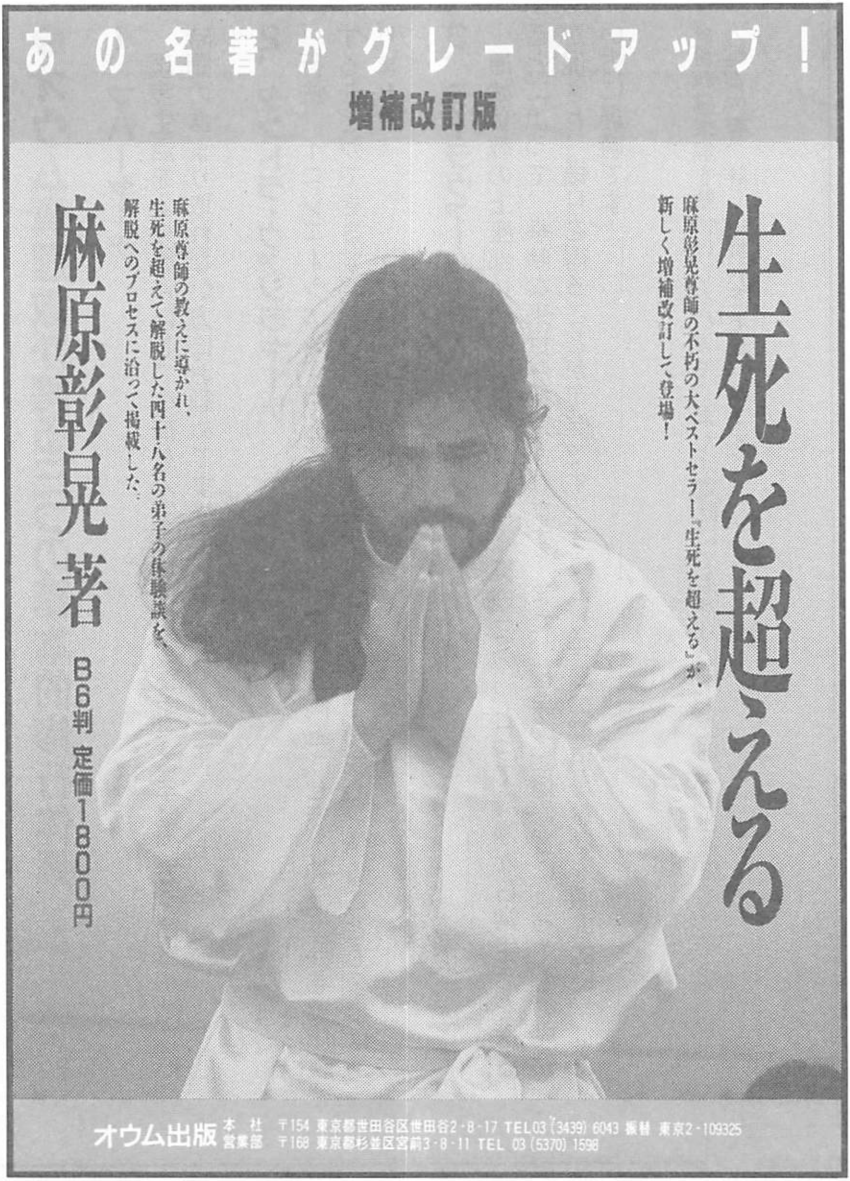
3、テーラヴァーダ

原始仏教の上座部仏教を再現しました。真理にのっとって清浄な日常生活を送ることによって、幸せな来世が約束されます。また、経典の記憶修習によって心の成熟が促され、悟りを得ることが可能です。オウム真理教の深遠な教義を徹底的に学びたい方に最適です。

※資料請求券を貼付けしたハガキ、または電話にて最寄りの本・支部までご連絡ください。入信案内等、詳しい資料をお送りします。

キリトリ線

神通力者への道4
資料請求券


あの名著がグレードアップ！
増補改訂版
生死を超える
麻原彰晃尊師の不朽の大ベストセラー『生死を超える』が、
新しく増補改訂して登場！
麻原尊師の教えに導かれ、
生死を超えて解脱した四十八名の弟子の体験談を、
解脱へのプロセスに沿って掲載した。
麻原彰晃 著
B6判 定価1800円
オウム出版
本社 〒154 東京都世田谷区世田谷2・8・17 TEL03(3439)6043 振替 東京2-109325
営業部 〒168 東京都杉並区宮前3・8・11 TEL 03(5370)1598

◆各道場のご案内◆

富士山総本部　0544(54)1267
〒418-01　静岡県富士宮市人穴381-1
東京本部　03(3327)8565
〒156　東京都世田谷区赤堤2-42-5 杉田村松ビル1F
新東京本部（杉並道場）03(3396)9393
〒167　東京都杉並区下井草4-4-4　井口ビル2F
大阪支部　06(397)1022
〒532　大阪府大阪市淀川区西宮原1-8-14 八光ビル2F
福岡支部　092(474)2877
〒812　福岡県福岡市博多区博多駅前2-6-15 第一渡部ビル6F
名古屋支部　052(252)0709
〒460　愛知県名古屋市中区栄5-8-14 万国ビル3F
札幌支部　011(241)4938
〒060　北海道札幌市中央区北2条西2丁目19-1 チサンホテル本館2F
京都支部　075(371)3759
〒600　京都府京都市下京区堀川通り松原上ル五軒町384 松本ビル2F
仙台支部　022(268)3904
〒982　宮城県仙台市若林区河原町1-4-20 十全会ビル2F
金沢支部　0762(51)8457
〒920　石川県金沢市京町25-20 ソフトオフィスビル2+4 2F
高知支部　0888(84)8286
〒780　高知県高知市はりまや町2-8-8 安藤ビル2F
広島支部　082(264)6250
〒732　広島県広島市南区西蟹屋4-4-18 和田ビル3F
横浜支部　045(243)8079
〒231　神奈川県横浜市中区若葉町3-41-2 コスモ伊勢佐木長者町ビル204
和歌山支部　0734(24)2859
〒640　和歌山県和歌山市駿河町42 和歌山酒販会館2F
水戸支部　0292(26)8044
〒310　茨城県水戸市中央2-2-1 HDビル6F
船橋支部　0474(66)4965
〒274　千葉県船橋市新高根6-26-18
那覇支部　098 (869) 7707
〒902　沖縄県那覇市安里2-4-12 嘉数グラビアハイツ5F
堺支部　0722 (21) 1843
〒590　大阪府堺市海山町4丁168の9
高崎支部　0273 (46) 1573
〒370-12　群馬県高崎市倉賀野町下稲荷1081-5
深谷出張所　0485(74)6205
〒366　埼玉県深谷市萱場441-8
渋谷出張所　03 (3476) 5065
〒150　東京都渋谷区道玄坂1-15-3　プリメーラ道玄坂317号
（海外支部）
ニューヨーク支部　212(421)3687
8 East 48th St. #2E (2nd Floor), New York, N.Y. 10017 U.S.A.
ボン支部　(0228)616647
Auf dem Hügel 48, Endenich, 5300 Bonn 1, S.R.Germany
スリランカ支部（AUM SACCA SANGHA ASSOCIATION)
Sorahena, Watta, Anglugaha, Galle, Sri Lanka

神通力者への道4
1992年8月23日　初版発行
定　価　600円
編　集　AUM PRES
発行者　松本知子
　　　　石井久子
発行所　株式会社オウム
　　　　東京都世田谷区世田谷2-8-17
郵便番号　154
電　話　03 (3439) 6043
振　替　東京2-109325
乱丁・落丁がありましたらお取り替えいたします。
AUM PRES　1992
ISBN 4-87142-051-5 C0014 P600E

神通力者への道 4

麻原尊師の愛弟子、
四名の体験

ISBN4-87142-051-5 C0014 P600E 定価600円(本体583円)